

---

# 闇路妖狐

狐禅

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト  
<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

闇路妖狐

### 【Nコード】

N0786G

### 【作者名】

狐禅

### 【あらすじ】

顔が異形のものに変化してしまった少年「憂」と僧侶「華梁」との交流を描いた和風ファンタジー（微妙にバトルあり） 本作の舞台背景は「神道の影響で仏教があまり広まらなかった日本」です。 本編は第24部からだったりします。

## 始

薄暗い、和室の家屋の縁側に二人の男が座っていた。

一人は、奇妙な狐の面をかぶった男。いや…男と呼ぶよりは少年と言った方がその男を表すには適した言葉のように思う。齢にして十過ぎくらいか。顔を隠しているので、年は想像でしかない。薄い緑色の衣を羽織り、見るとは無しに中庭の方に視線をやっていた。

もう一人は、黒い法衣を着た男だ。年は少年よりも一回りは上だろう。

剃髪はしていない。

整えてあるようで無いような、ぼさぼさ頭をしている。

男の片手には、酒の入った丙子が握られていた。

時折、それを口に運びながら、何の気無しに庭の風景を眺めている。

夕暮れ時、辺りは夕焼けのあか色に染まっていた。

かなかなかな

蛸の鳴き声が、他の鳴き声と覆い被さるようにして静かにこだましている。

昼間降った雨のせいだろう。夏草は白玉のような水滴をつけ、き

らきらと光っていた。

「なあ、憂。」

唐突に法衣の男が狐面の少年に話しかけた。

憂と呼ばれた少年が、法衣の男の方に顔を向ける。

「人はなぜ苦しむかと言うことを考えた事があるか？」

そう、問うた。

憂は首を振った。

「人は己自身で自分を苦しめる。」

そう言っ、手に持っている杯で床をこつり、とたたいた。

「今の音、耳には残っているか？」

辺りは蝸の鳴き声しか聞こえない。

憂は首を振った。

「な？これほどはつきりしている。」

憂は首をかしげた。

「つまり、この世には今しか無い。過去と言うのも未来と言うのも全て頭の中の想像でしかない。…俺が杯でた床をたたいた音はたたいた瞬間にもう終わっている。それなのに、人は記憶してその事柄に執着する。終わったことをいつまでも頭の中で反芻する、事実

はこんなにはつきりとしているのにもかかわらず、だ。」

ふたたび暦縁は杯を口に運んだ。

「大切なのはありのままの自分。蝸の鳴き声は聞こうと思わずとも耳に入る。肌は夏の暑さを感じる、目は夏の庭を見せてくれる。舌は酒を飲めば酒の味がするからな」

そう言つて、憂の頭をなでた。

「この世には、苦しみは残っていないのさ」

「人の苦しみというのは、常に頭の中にある。」

「頭の中で悩み、自分自身で、自らを苦しめているのさ」

「だからお前は、何も苦しまなくていいんだ。今のお前を何一つ変えることはない」

かなかなかな...

蝸の声が辺りに鳴り響く。

ぼとり、と

憂の膝の上に一粒の雫がしたたり落ちた。

ぼとり

ぼとり

一つ

また一つと

憂の膝の上に染みを作っていく。

ぼとり

一つ

ぼとり

二つ

憂の視界が、染みを作るたびにぼやけてゆく。

ぼとり

三つ

ぼとり

四つ

ああ、そうか

ぼとり

五つ

ぼとり

六つ

これは

ぼとり

七つ

ぼとり

八つ

ながく、永く忘れていた

ぼとり

九つ

涙というやつか。

とお。

## 一話 闇路妖狐

水滴がぽとりと、僕の頭の上に落ちた。

そこで突然、僕の意識は目覚めた。

…ん、

僕は、眠っていたのだろうか。

暗い。

前方に少しだけ見える月明かりが、かろつじて辺りを見回せる程度にこの場所を照らしている。どうやらここは、どこかのほら穴のようだ。

どうしてこんな所にいるんだっけ？

…思い出せない。

…いや、思い出せないのではない。

これは

思い出したくないだけなのだ。

以前にもこういう事があった。

いやな思い出があると、僕の頭は思い出すのをやめようとする。

本当に、

本当に僕の頭は弱虫なのだ。



いやなことからは逃げ出そうとし、そのくせ必死に自分を強く見せようとする。

きつと思ひ出せば、また心が傷つくのだろう。

とにかく、外に出よう。

逃げようのない現実を直視すれば、いやでも思ひ出すはずだ。

僕は立ち上がり、明かりの見える方へと歩き出す。

足が、痛い。

使い過ぎたのだ。きつと。

暗く冷たい洞窟を抜け、月明かりの下へと歩み寄る。

いやなにおいが鼻をつく。

たとえるなら、そう

鉄の、におい。

月明かりの下には、幾人もの死体が積み上げられていた。

数は、ざっと数えて三十はある。

全ての死体が、首をかき切られるようにして死んでいた。

見覚えがある。

この傷を僕は、何度も見てきた。

ぼやけていた記憶が、ようやくはつきりとしてくる。

今回の山狩りの人数が、たしか三十だったはずだ。

ここにある死体が三十。

と言うことは、

やはりこの人たちは

僕に…殺されたのだろう。

「よお」

急に後ろから声をかけられ、思わず振り返った。

そこには手に網代傘を持った僧形の男が立っていた。

年は二十後半位だろうか。短く切りそろえた頭に、狐のように細い目をしている。左目には刃物で切られたような傷があった。

僕は彼に以前あったことがある。

名前は確か、華梁<sup>かりよう</sup>、といったか。

華梁は辺りを見回し、軽くため息をついた。

「…派手にやったな憂。」

そう言って、ひいふうみい…と死体の数を数えだした。

「…三十ね。皆殺しか。…これでここいらにはもう住めなくなったな。」

皆、殺し…

そうだ、この死体は僕が作ったのだ。  
それを、改めて実感する。

でも、

でも、僕は、

…何もこいつらを殺したかった訳じゃない。

「…俺は」

「おっと、言い訳はするなよ」

その言葉で僕は口をつぐんだ。

「言い訳なんかして自分のやったことを正そうとするな。ここにはお前がこいつらを殺した事実しかないんだからな。お前がどんな言葉で俺の同情を買おうともやったことは何一つ変わらないだろ。」

厳しい、言葉だ。

僕がうつむくと、華梁は再び軽いため息をついた。

「…言わずとも事情くらいわかってるさ。こいつらがお前を化物扱いして殺そうとしたんだろう?」

もう四度目だからな、と小さくつぶやく。

「今度は何があった？」

何が…？

そうだ、僕は…

あのとき酒屋の主人に、

「…顔を、見られた。」

言葉を話すとずいぶんと自分がしわがれた声になっている事に気がついた。

まるで、獣の声だ。

華梁は「…そうか」とつぶやき、ぱんと僕の頭の上に手を置いた。

「…暦縁さんから、お前のことを頼まれてね。しばらくお前をかまってやってくれたとさ。」

華梁は僕の目線の高さまでしゃがみ、じっと目を見た。

「どうだ、俺の所に来るか？どうせここにはもういられないんだろっ？」

狐の面の隙間から華梁の顔が見える。

華梁の目は片目がつぶれているが、

…その目はとても、とても澄んで見えた。

「…俺は、」

僕は

誰でもいい、

きつと暦縁さんがいない今、誰かのそばにいたかったのだ。  
小さくうなずいた。

「決まりだな。こつちだ。」

そう言うてにっこりと笑い、華梁は僕を連れて森の方へ歩き出した。

## 二話 狐面

憂<sup>ゆう</sup>

それが僕の名前だった。

歳は十を数えた時から記憶していない。僕自身、歳を数える事をそれほど重要なことだとは思っていなかった。生まれてから今まで、どれほどの時間が経過しているかを把握していても何か得があるととは思えない。

そもそも…僕にとって歳とは、これほどの時間、僕は生き恥をさらしてきたのだ、と。否応なしに再確認させられる…忌まわしい物でしかないのだ

それでも、十の頃までは違っていた。

…こんな言葉を使うのは月並みで恥ずかしいが、まだ夢を持っていた。

まだ、未来に希望を持っていた時期だ。

早く大人になりたいと、歳を重ねるのが喜びでもあった。

…でも、

十の終わりの頃、僕の生活に異変が起こった。

それは、普通では決して起こりえない、異常な変化。僕の、顔が、

あり得ない物に、変わり始めたのだ。

その頃から、僕は他人を恐れ、忌み嫌う様になった。

夢も無くなった。

希望もなくなった。

ただただ、自分の境遇を恨み、他人を恐れる様になった。

僕だけじゃない。

他人も、僕の姿を見て恐れる様になった。

僕の姿を見れば、人は

化物、と

そう、呼び始めたのだ。

殺そうとするものまで現れた。

災害が流行れば僕のせいになされた。

疫病が流行れば僕が原因になされた。

村人全員で、僕を殺そうとした時もあった。

僕は、必死で逃げた。

必死で、逃げて、逃げて、逃げ隠れている内に

…ふと、声が聞こえた。

現実じゃない。

僕の内側から、その声は聞こえてくる。

初めは何を言っているのかが分からなかったが、

声は次第に鮮明になり、はっきりと僕の意識に訴えるようになっていった。

所詮生まれた時からお前は人と相容れぬ身なのだ。

お前は何も悪くない、お前はそのような役割で生まれて来たのだからな。

ならば…悪いのはお前を殺そうとする者だ。

あちらがお前を殺そうとするのなら、お前もあちらを殺してやれ。

なに、お前はそのような力を持っている。

それが、お前の役目なのだ。

そうすれば、お前の恐怖は無くなる

声は、そう言った。

いつしか僕はこの声に耳を傾け、

我を忘れたときに、僕はその声に体が逆らえなくなっていた。

気がつけば、僕は目の前に死体の山を作っていた。

覚えがない。

何も覚えていないのに、殺した死体の数は増えていく。



ただ後に残るのは、絶望。

いつしか僕は人と交わらぬよう、陰で生きることしか出来なくなっていた。

僕は、自らの顔を隠し、暗闇に隠れる様にして生きた。

大切な人にもらった、狐の面をかぶりながら。

### 三話 香泉寺

歩くこと半刻ほど、着いた先には小さな古寺があった。

苔に覆われた山門には、香泉寺と名前が書かれてある。長い間人が住んでいなかったように、どこかしこもぼろぼろだ。屋根の上は割れた瓦。その間から名も知れぬ雑草が生えている。はげた白壁は黒ずみ、庭はのび放題の草で覆われている。

辺りが森の木で覆われているせいか全体的にここは薄暗い。とても人の住める場所じゃないように思う。

「なに、住める場所は別に作ってある、心配しなくてもいいぞ」  
華梁は僕の心を見透かしたようにそう言った。

山門をぬけ、中へ入る。

しばらく歩くと、本堂の前にぽつりと何か立っているのに気がついた。

小さな、人影。

どうやら紅い衣を着た娘のようだ。

長い黒髪が特徴的な、どこか人形を思わせた、線の細い印象を受ける娘だった。

外見から見ると、歳は僕とそう変わらなそうだ。

「涼美が出迎えてくれるとはな。何かあったのか？」

涼美と呼ばれた娘は微かにうなずいた。

「お客様です華梁さん。」

娘は一言そう言つて、そそくさと寺のなかへ入っていった。

「…相変わらず無愛想な奴だな。」

ぼりぼりとほおをかきながら、困ったように華梁はそう言った。

「あいつもこの寺の同居人だ。訳あつて一緒に住んでる。無愛想な奴だが仲良くしてやってくれ。」

…前途多難だ。華梁と同居するのでさえ戸惑つてしまつのに…

「ほら、こつちだ。遠慮しないで入れ。」

華梁に案内うながされ、香泉寺の中へと入った。

もつとひどい所を想像していたのだが、中はわりかしきれいだ。畳はしっかりとしているし襖や障子戸の破れが無い、寺の手入れはしっかりとしているらしい。

なるほど、確かにこれなら、住むには困らないだろう。

案内されるままに廊下を歩いていくと、華梁は小さな部屋の前で立ち止まり、僕の方を振り向いた。

「すこしここで待つていてくれ、客人に会ってくる。」

「なに、かまいやしない。そいつも一緒に部屋へ入れてくれ。俺は元々そいつに会いに来たのだ。」

部屋の中からしわがれた声が聞こえた。

「なんだ、仙人じいさんか…」

華梁はため息をつくように言つて、襖の戸を開けた。

中には、ぼろぼろの衣を身にまとった奇妙な老人が座っていた。

白髪白髭。何年生きているのかも分からない華梁の言った仙人という言葉がぴたりと言い当たる。

「おう、そいつか暦縁の言っていた憂とかいう小僧は。」  
からからと笑いながら僕の方へ手招きをする。

「ほら、もっと近くへ寄ってくれんか。この年になると目がよう見えんな。」

言われるままに、老人の方へ近づいた。  
ふんと、酒臭いにおいが鼻をつく。

「ふん、奇妙ななりをしているな。狐の面か。」  
どれ、と言つて素早く俺の面に手かけ、外した。  
とつさのことで、なすすべもなく老人に面をはがされる。

「おい、じいさん！」

華梁が叫ぶのも気にせず、老人はぎょろりとした目で僕の顔を見た。

ほお、と老人の口から声が漏れた。

## 四話 面の下

「こいつは珍しい、狐憑きか。…いやここまで来ると狐憑きとはいえぬなあ」

老人は顔を近づけるようにして、じろじろと僕の顔を眺める。

狐憑きか。

確かにこれは狐憑きとはもういえない。  
たえて言うなら、

「狐そのものだな。」

そう、

僕の顔を半分は、狐のそれに変わっている。

黄金色というよりは白に近い獣の毛並み。

細く、鋭い目

片側だけは獣の耳が生えている。

鋭い牙

そして何より、

自分のものとも思えない獰猛な瞳が、

野に生きる狐、そのものだった。

「いや、悪かった。」

老人から面を返され、僕はそれを顔につけた。

「噂に違わぬ奇妙ななりだ。まるで人と狐の合いの子のような。」  
ふむ、と老人は腕を組み考え込むように小さくうなった。

「…お前さんのそれは確かに狐憑きの一種だよ。まあ、狐憑きつてえのは一種の呼び名で、種を明かせば只の気ふれだがな。…要は心の病だ。それはお前さんの心がそうしたんだ。」

「…こころ、が？」

ああ、そうだ。と老人が言った。

「多分、お前さんは強い心の病を負っている。お前自身がお前をその顔にしているんだろ。」

僕の心のせい？  
ならば、

「…これは、俺のせいなのか？」  
老人はうなずいた。

「…じいさん、言ってることは分かるけど、いくら何でも心のせいでここまで変わるものなのか？」

「変わるだろう、人は思いで死ぬこともある。病などほとんど心に関係していると言っていいからの。…こいつの場合はそれがずば抜けて強かっただけだろうな。」

「…治せるのか？」

「所詮心の病だ。心の病は心で治す、お前さんが変われば治るところがあるかもしれぬ。」

「…あなたは何ものだ？なぜ今まで俺が分からなかったことをそ

「う易々と見抜けるのだ？」

「僕がそう聞くと老人はぼりぼりとほおをかいて、困ったような顔をし、「そついえば名前すらお前に言っただけな……いや、失礼」と言った。」

「一応、方千という名だが、ここらでは仙人じいさんで通つとる。仕事は、……そうだな医者というのが一番近いかもしれぬな。と、いつでも薬などは使わぬ。もっぱら心の病をなおしたりしている。しがないじいさんだよ。」

「医者……？」

「お前さんのそれもまた心の病、治せぬ事はない。が、それなら暦縁のもとを出ず、教えを聞いているのが一番早かつたはずだ。人の悩みを取り去ることにかけては暦縁の右に出るものはおらぬからな。」

なぜ、暦縁のもとを去つた

「……俺がいると暦縁さんに迷惑がかかる。」

「なにがあつた？」

「ひとを、殺した。」

「ひとを？」

「ひとをたくさん。数え切れなくらいたくさん殺した。」

「なぜ」

「俺を襲ったからだ」

「なぜ」

「俺は、人と違うから、顔は狐、心は獣、人ではない、人と違う、だから殺そうとしたのだ。…人じゃないからだ。俺は」

違うな

しずかに、僕の口をふさぐように華梁がそう言った。

「人が人と違うのは当たり前だ。この世には同じものなぞ何一つ存在しない。ひとつひとつが個別に、ひとつひとつが単体で存在している。人との違いと言うのも単なる思いでしかないのさ、何かと比較することによって生まれるものが優越感や劣等感。…基準もないのに、そんなものを頭で作り出してお前は苦しんでいるだけだ。」

それは、かつて暦縁に言われたことと同じ言葉。

自分で自分自身を苦しめているだけさ

そう、彼は言ったのだ。

でもどうしても僕にはそれが分からなかった。

僕の見えた目が

僕の顔が

僕の振るまいが



僕の心が

生まれたときから悪いとしか思えないのだ。

## 五話 方千

「…なるほどの」

ほんの少しの沈黙のあと、方千が口を開いた。

「曆縁が華梁にお前を預けた理由が分かった気がするな」

「…え？」

「憂と言ったか。」

「…ああ」

「すこし華梁の仕事の手伝いをして見る。」

「仕事の？」

「そうだ。のう、かまわんな華梁？」

「…まあ仙人じいさんがそう言うなら。丁度人手もほしかった所だからな。」

「よし、決まりだ。」

そう言つと方千はよいしょと、声を出し立ち上がった。

「さて、わしは帰るとするか。…それから、わしのことは仙人じいさんでよいぞ」

縁側から中庭の方へと歩き出した。

ちら、と振り向く

「…お前さんの心は読みやすいの、もっと素直になればよいのに、  
のお「僕」？」

ふお

ふお

ふお

方千は高笑いした。

「後は頼んだぞ華梁。」

しょうがないな、と華梁はつぶやいた。

そのとき、強いつむじ風が吹いた。

思わず顔をそらす。

風が止み、もう一度向き直ると、方千の姿は無かった。

「…何者なのだ、あの人は？」

「…俺も詳しくはないがね、昔仙術を極めたって聞いているが、  
まあ、謎のじいさんだよ。」

「…人の心が見えるのか？」

「まさか、そりゃ無理だ。いくら見えたところで人の心なんか確かめようが無いからな。確証がないものは単なる想像でしかない。」

…まあ、読心術の一種だよ、じいさんがやってるのは。確かに、じいさんののは多少神がかったっているけどな。」

読心術、か。

でも確かにあの人は、

僕のことを「僕」と言った。

僕が自分のことを「俺」と言っているのは強がりだ。単なる見栄、外側だけは強く見せようとしていただけのことだ。

それを、華梁の言う「読心術」で読んだと言っのか。

それは…いくら何でも、不可能だろう。

僕は読心術というものはどう言うものかは分からないけれど、そこまで読めるのであればそれはもう、人の心が見えているのと一緒にではないか。

方千…仙人じいさんか。

暦縁さんとどういう関係の人なのだろうか。

「ほら、行くぞ憂」

突然、華梁がそう言った

「行くって、何処へ？」

「何処って、決まっているだろう?」

お前の殺した死体の所へだよ。

「…は?」

僕の言葉を待たずに、華梁は僕の手を無理矢理引いて、再び森の方へと歩き出した。

## 六話 欠落

「おい、何を考えてる……」

「何を、つて？」

「何故今更あそこへ戻る必要がある？」

「何か問題があるか？」

危険だ

おそらく、他の村人に見つかる。

そうすれば、又殺される危険が出る。

そう言おうとしたとき、いきなり華梁に頬を殴られた。思わず、地面に倒れ込む。

「…何をするんだ？」

「痛いかな？」

「当たり前だろう？」

「だろうな。人の体つてのはそういう風に出来ているからな。」

「…はあ？」

「痛い時には痛いと感じ、心地の良い時には心地よいと感じる。飯を食べば、飯の味がするし、音が鳴れば聞こうと思わずとも耳に入る。それほどまでに人の体ってのは便利に出来ているんだ。」

「なに、当たり前の事言っているんだ？」

「当たり前ね。…人間のその当たり前をいとも簡単に壊したのは誰だ？」

びくり

刃物を突きつけられたような感覚がした。

冷たい汗が、僕の背を這う。

「…後悔はしてる。が、ああしなければ俺が殺されてた。」

「何、責めるつもりは毛頭無い。憂を責めたところで死者はよみがえったりはしないからな」

ただ、と華梁は続けた。

「悔いてはもらう。人の体とはそう簡単に壊しても良い代物ではないんだ。今のお前にはその考えが欠如しているんだよ。」

なにを

なにを言っている？

「そんなことはない」

「あるさ。」

ない

無いはずだ

そんな考えが欠如したら、

僕は本当にけだものになってしまふ。

「ふうん」

「…何が言いたい？」

「おそらくお前はこう考えたんだろ？「今行けば、いつまでも帰ってこない村人を心配した人達が探しにやってきているかもしれない」とかさ」

「…それが、どうした」

「その考え方こそが欠如している証拠だろう？死んだもののことよりも、自分のことを優先的に考えている…まあ、それが普通なのかもしれないがね。…ただ、お前は決定的に欠けている、思い出せ。あのときほら穴の中で、お前は何をしていた？」

何もしてない。

してない、と思う。



記憶は曖昧だが、僕のことだ。

おそらくほら穴の奥で、

追っ手が来るのを恐れてがたがた震えていただけだと思う。

「自分の殺した死体を目の前にして、だ。しかたなかったとは言え、曲がりなりにも人を殺めている。普通なら埋めるなり一房の花くらいは供えるさ。それが正常な行為だよ。…だが、お前は何をした？」

そうだ。

身を守って何が悪い。

僕はほら穴の中で身を守っていただけ。

「だから…まさか本当に覚えてないのか？」

「おまえさ、洞窟の中でずっと死体を殴ってたんだぜ」

## 七話 怖

は？

何を言っている。

そんなこと

「うそだ」

「…やっぱり、気づいて無かったんだな」

僕が、ずっと？

「俺があそこに着いたのは、本当はお前に会うもう少し前だよ。  
あの場についたら、ほら穴で物音がした。…見てみると、お前はあ  
の中の死体の一つを、無心に壊していた。…無表情でな。さすがに  
俺も声をかけるのを躊躇ったよ。…声をかければ、俺も殺されると  
思った」

本当か…

本当、なのか？

まったく…覚えてない。

それが本当ならば、それは、…いつもの僕の弱さだ。  
いやなことは全て忘れようとする。覚えてはいないが、そのとき

僕が何を思っでその行為を行っていたかは容易に想像が出来る。

きっと

報復が、怖かったのだ。

普通は首を潰せば終わりだ、息の根を止められる。報復などあるはずがない。

ただ、僕の場合は違う

うでが残っていれば、腕だけでも報復に来るかもしれない、そう思ってしまうのだ。

冷静に考えれば絶対にそんなことは無い。  
ただ、恐怖が僕の冷静さを無くす

足があれば足が報復に来ると恐怖する。

上半身が残っていれば、這ってでも仕返しに来るかもしれない。

恨みがましい顔が怖いのだ。

なら腕を壊せ

足を壊せ

顔を潰せ

耳をちぎれ

鼻をもげ

そうしている内に、

全部壊してしまったのだと思う。

確かに、人間のやることではない。

けどものの所行、否、それ以上。

そんなものは鬼の所行だ。

己の恐怖のままに身を投じ、死体を殴っていたんだ。  
理性なんて欠片もあつたもんじゃない。

僕は。

けどものに…

「おい」

其所まで考えたところで急に華梁に声をかけられた。

「思い詰めるんじゃない。お前のそれは今までの出来事がきつかけで起こった、単なる欠落でしかない。何もお前が人の心無くしてるとまでは言っていないさ」

「…だが」

「だが、も、何もないさ。さっきも言った通り、自分をどう評価しようが、死者は生き返らない。…俺が見せたかったのはあれだ。」

見ると、洞窟の前にはたくさんの人だかりが出来ていた。

ただその人達は、報復が目的で来た訳では無いことは一目瞭然だ

った。

死体にすぎる小さな女の子

足のが動かないのに、死体の方へ這おうとする老婆

必死に死体を抱き起こし、母の名を呼びかける男の子。

死体を視て涙する老人

父の死体を探し回る子供を抱えた母親

およそ、僕を殺しに来たとは思えない。

人々は一様に、瞳に涙を浮かべていた。

「…分かるだろ、憂。いや、分かっていたはずだ。人を殺せば必ず悲しむ人がいる。お前はそれに目を背け続けていたんだよ。」

じつと、僕はそれを見た。

「…所詮この世つてものは、我が身の外でしか起こらない。だからお前は自分で自分の罪を、自分の中で悔いる事しかできない。…知るんだ。目を背けるな。お前のやったことは、ああいうことなんだよ」

人々は一様に涙を浮かべている。

僕は、顔を伏せた。

悔いること

罪は、感じていたのだ、何度も。僕の中で。

ただ

分からなかった。

悲しくも思った、罪な事をしたとも思う。だけれど

僕も殺されかけた…と。

どうしても自分の中で、自分のやったことをごまかそうとする感情が起こる。

やっぱり自分は、けだものなのだ、と。

そう、思った。

飛翔 夜空を舞う鳥の如きもの

満月の月が、煌々と輝いた夜だった。

月の光が、夜の森を明るく照らしている。  
白く明るい夜の中、鳥の如き姿をしたものが、優雅に空を舞っていた。

時にはゆらゆらとさまよいながら森へ降り  
時にはするりと高度を上げて。  
まるで何かを探すように、いつまでも夜の空を舞っていた。

もの悲しい。  
なぜか、見る人をそう感じさせる光景だった。

月を背にしながら、僕は夜空の中を飛んでいた。

心の中は、澄みきっている。

純粋な、憎しみ。

その憎しみに対する、嫌悪、疑念、抑止力、そんなものはない。

完全なる憎しみだ。

だから心の中はとても穏やか。これからやろうとする行為に一切のためらいは無い。

そうだ。

僕は飛んでいる。

気がつけばここにいたが、確かに空の上なら奴を探しやすい。

狐を探すために、無意識のうちに空を選んだか…と、そう思えてくる。

僕の体の下には、真っ暗な夜の森がある。

空気は澄んでいる。

心地よい風が僕のほおをなでた。

こうしてゆらゆらと漂っていると、徐々に意識が失い始めるようだ。

狐を。

狐を。



狐を、探している。

父を殺し、

母を殺した。

母は、何も関係がなかったはずだ。

狐を、あいつを…殺そうとした訳じゃ無い。

ただ、その場にいただけなのだ。

父の事が心配で、後を追っただけだったのだ。

なのに何故。

なぜ殺した。

つう、と

ほおに涙がつたった。

僕は夜空を浮遊している  
月を背にしながら。

## 八話 涼美

夢を、見ていた。

誰かに体を揺すられて、眠りから目を覚ました。

辺りは暗い。まだ朝にはなりきっていない。

隙間からかすかにもれる月明かりが、部屋の中を少しだけ照らし出していた。

まだ頭がさえきっていない。今見た夢のせいなのだろうか…

…夢。

僕は、どんな夢を見ていたのだろうか？

…考えてみたが、どうしても思い出す事ができない。

微かに覚えている光景も、いつの間にか僕の奥深くに沈み込む様にして、消えていった。

…まあいい。

どうせ夢のことである。忘れたということは、たいしたことではないだろう。

ふと、目をやると、部屋に誰かがいる。

髪の長い、人形のような娘

そう、名前はたしか

…涼美<sup>りょうび</sup>、といったか

「朝です」

静かに、辺りの風景に溶け込む様な口調でそう言った。

「華梁さんがお呼びです」

表情を変えず、口だけをかすかに動かすようにしてその言葉を発している。

なぜ、この娘はこれほどまでに表情を変えないのだろうか。

他の表情が想像できない。

感情と言うものが、欠落しているのだろうか…

闇夜にうつる彼女の顔は美しい。

だが、美し過ぎる。人の作る表情じゃない。

作り物だと、そう言われた方が、すんなりと彼女を受け入れられる気がする。

人の形をした作り物。

…まさしく人形だ。

体を起こし、軽く頭を振った。

そんな事はない。

彼女は、人間なのだ。

見た目で人を判断するのであれば、僕の場合は化け物。

そうでは、ない。

そうではないと、信じたい。

彼女も僕もまた、人だ。

彼女は、感情の読み取れない目で、僕の方を見つめていた。

涼美は、静かに立ち上がった

「居間でお待ちです」

そう言って、音もなく部屋を出て行った。

存在が希薄な少女だ。

現実感が無いのだ。

この場においても、まるで涼美がどこか別の場所にいるように感じ  
てしまう。

今僕と会話していたことも、今見た夢の続きのような気がしてくる。

心を閉ざしている。

それが僕が感じた、彼女の印象だった。

僕は軽く伸びをして、居間に向かった。

居間では華梁が僧形に着替え、茶をすすっていた。僕の顔を見ると「おはよう」と言っって片手を上げた。

「悪いな、急に仕事が入ったんだ。憂も同行してもらっ」

そう言っって、一気に茶を飲み干した。

「仕事？」

「そう、仕事だ。」

仕事、か。

そう言えば、まだその仕事の内容と言っものを聞いいていない。

「すぐ、出発だ。準備しろ。」

準備するものなど無い。

着物も一張羅である。寝間着も普段着も区別が無い。

「…仕事とは？」

「改めて聞かれると説明するのが難しいんだが…行きがてら教えよう。」

華梁はそう言って軽くあくびをした。

## 九話 人の思い

「俺の仕事っていうのは、一言で言えば、この世に現れた「不必要なもの」を無くしてるんだ。」

夜の森を駆けながら、華梁がそう言った。

「不必要な、もの…とは？」

「そうだなあ…この世界が網の目のような関係にある。お互いがお互いを支え合い、何か欠ければ、何かが狂う。均等を保ちながら、この世界は作られている」

たとえば、魚と人の関係

人は魚を食べるために殺しているが、魚の方もまた、人に食べられなければ数が増えすぎてしまう。

人は魚を必要とし、魚も人を必要としている。  
お互いに補い合ってこの世界に住んでいるのだ。

これは、どんなことにでも言えることだな。

植物でもいいし、動物でもいい。

ウサギだっていいし蛇だっていい。

どんな生き物でも、どんな些細な存在でも、それがいなくなれば何かしら世が狂う。

俺たちはそれを「理」と呼んでいる。

「理」は存在しているわけじゃない。

言うなれば、世の流れ。この世を混乱させないために、見えない手でこの世の均等を保とうとしてくれている。

こんな話を聞いたことがあるか？

ある生き物は、爆発的に数が増えてしまうと、自ら崖から飛び降りてその種の数減らすそうさ。

数が増えすぎてもいけないことを、本能で知っているからだろう。これもまた、理の見えざる手が働いている結果なんだろうな。

戦だつてそうだな。あれも増えすぎた人を淘汰するために理の手が働いたのかもしれない。

そのようにして、この世は成り立っているんだ。

だから、この世に存在しているものは、何一つ unnecessaryなものはない。

分かるか？

僕は頷く。

聞いたことはあるし理屈も分かる。

「だが、その均等を崩すものがあるんだ。」

「… unnecessaryなものなど無いのではなかったのか？」



「その通りだ、ただし、この世に存在しているものならな。」

「それじゃあ……」

「存在しないもの……それが均等を崩しているのだ。」

「どういう事だ？」

「存在していないはずなのに、存在するもの……それが」

人の、思いさ。

「は？」

「人は、思いで生きている、悲しいとか嬉しいとか苦しいという感情も、すべて「思い」だ」

それが、

あまりに強いと、自分の内側から抜け出てしまつ。

「どういつ、ことだ？」

そう聞くと、ぱりぱりと頭をかきながら「言葉で説明するのは難しい」と言った。

「実際見るのが一番早い。ほら」

そう言つて、華梁の指を指した方向には

月が浮かんでいた。

大きな、丸く、白い月。

その月を背にしながら。

何かが浮遊していた。

「あれが、均等を崩すもの、だ。」

それは子供の姿をしていた。

顔には、白い札。

短髪に細い腕。浅黄色の衣

風に身をまかせながら、それはこちらをじっと視ていた。

「人の思いが形になったもの。怨恨や欲望の姿だよ」

華梁は目を細めた。

「理は、あれを無くすために以前、とんでもないものをこの世に生みだしてしまった。…俺たちはそれを再び生み出さないために、人の体から抜け出た「思い」を無くしている」

僕の方を振り返った。

「…これが、仕事だ。」

怨恨

恨み

悲しみ

それが起こるのは必ず原因がある。

原因とは、

何に對しての？

否

…誰に對しての、か。

僕はあの姿に見覚えがあつた。

あれは

僕の殺した死体を抱き起こし、泣いていた男の子だ。

## 十話 狩

ゆらゆらと、月を背に浮かぶ。

僕は再び暗い森に視線を移した。

そのとき、僕の足下で、駆ける二つの影を見た。

一人は僧形の男

もう一人は、

… 白い狐の面をつけている。

その二人は、いつの間にか立ち止まり、じっと僕の方を眺めていた。

にたりと、笑みがこぼれる。

… ああ、ようやく見つけた。

狐が、いた。

ゆらり、と奴の身がゆらいだ気がした。

「…まずい、見つかったな」

華梁が言った。

「見つかった？」

「間違いない。…っと来たぞ。構えろ」

見ると、さつきまで月に有った人形の陰は、もう無くなっていた。その代わり、こちらの方に向かい、鳶のように架空してくる人影が一つ。

人影は飛んでいた。

陽炎のごとくおぼろげな身を翻しながら、夜の空を飛ぶ。その姿ははかなく、そして美しかった。

「あれは人の姿ではあるが、人と否なるものだ。けして見誤るな、命取りになるぞ。」

華梁が錫杖を構える。じゃらり、と音が鳴った。

「なあ、華梁。」

「なんだ？」

「よく分からないが、あれは人の思いが作り出したものなのだろう？」

「ああ」

「原因は、俺か」

華梁は少し思念したあと「…そうだ」と言った。

「ならば、あれは俺の領域か。」

僕の手で作り出した恨み。それが、形になったもの、

そうか、

ようやく僕にも裁いてくれるものが現れたか。

「おい、生身のお前じゃ相手にならんぞ。」

「試さなくてはわからぬ。」

それに

「あれが人では無いのなら…俺とて同じだ。」

奴との距離が迫る。

奴が、僕に触れる瞬間、

僕は、奴の頬をを薙ぎ払った。

爪が、肌に食い込む。

手応えが、あった。

奴の身は前方の木に勢いよくぶち当たり、地面へ倒れ込んだ。

## 十一話 捕食

何かが僕の中でささやきだした。

そうだ。お前はそれでいい。

お前には、力がある。

そして、お前の目の前にいるものも、だ。

それがお前に向けられた憎しみの姿だ。

お前の憎しみと、どちらが強い？

理性が、無くなっていく…

ああ…そうだったな。

これが、「俺」の役目だ。

「おい。」

うずくまっているそれに声をかけた。

まだ子供の面影を残す小さな体。

そして顔には、

白い、札のようなものが貼り付けられている。



見覚えがある。

この札は、奴の持ち物だ。

「……ずいぶんとあっけないな、俺が世を恨んだ憎しみはこんなもんじゃ無かったぞ。」

それは、腕を立てゆっくりと立ち上がるうとしていた。

「来るならそれを超えるものでこい、でなければ、俺は裁かれぬ。」

「俺」はもう一度、腕を構え直した。

それが、飛び跳ねる。

木の丈をも超える飛躍で、再び空を舞った。

だが、先ほどの優雅な飛行ではない。それは傷ついた鳥のように弱々しく、触れればすぐに地に落ちそうだ。

あの高さなら、落とせる。

「俺」は近くにあった杉の木に足をかけ、素早く両手で自分の体を空へと押し出した。

飛躍。

失速するたびに、他の木でそれを行う。

最後に足を蹴り出したときには、「俺」はそれよりも上空にいた。

それは、おびえた顔をしながら僕の方を仰ぎ見ていた。

少しだけ残った理性が、今の僕の姿を、客観的に眺めている。

気づけば自然と口が曲がっていた。

嗤っているのか僕は？

なんて、醜い。

これはまるで、

狩り、だな。

そうだ…これはまるで狩りだ。

弱った小鳥を落とす、狐である。

「俺」は片腕でその頭を押さえ、そのまま地面へ落下した。

「…悪いなあ。お前の恨みじゃ、俺のことは殺せないみたいだ。」

地面にたたきつけられる直前、「俺」はその額に張つてある白い札を強引に引きはがした。現れ

た顔は青白く、恨みがましい目で「俺」の顔を凝視していた。

目が合う。

それはかすかに口元を動かし、

おかあさんと

そう言ったような気がした。

地面に、落ちた。

## 十二話 ほんの少しの前進

おい、憂！

華梁の叫び声で、理性を取り戻した。

目の前には、気を失った子供の姿。

「え、あ…？」

僕は、今

何をしていた？

僕は、右手を振り上げるような形で止まっていた。

これを振り下ろせば、目の前の子供は確実に死ぬ。経験で分かる。

じゃあ、僕は

この子を、殺そうとしていたのか？

「やめろ、もう。」

華梁がその少年の前に立はだかった。

「こいつを傷つけても何の解決にもならん。これはこいつの意味だ、

実体がない。…普通なら触れることも出来ないはずなんだが…、まあそれはいい。とにかく、お前はもう手を出すな」

冷たい視線。

僕は、目をそらした。

僕は

僕は、

何をやっているのだ。

もう、殺したくないのに。

せつかく、暦縁さんが諭してくれたのに。

これじゃあ、何にも変わっちゃいない。

昔と同じ、…ただの獣だ。

体の力が抜け、よろよろと近くの木に寄りかかる。

華梁は、そんな僕を一瞥し、少年の方へ向き直った。

「…問題は、こいつか。…ああこりゃ洞穴の前にいた子供だな。それなら話は早い。」

そう言つて、華梁は立ち上がった。

「お前は、ここで待ってる。少し出てくる。」

「…何処に、行くんのだ？」

「こいつの実体の所へだ」

と言うことは、

…あの村か。

「俺も…」

「だめだ」

即答だった。

「お前は面が割れているだろう？見つかると面倒だ、家で待ってろ」

冷たく…華梁はそう言い放った。

でも、僕はここで引き下がるわけにはいかない。

ここで引き下がれば、僕は只の人殺しなのだ。

…こいつの母親を殺したのは僕なのだ。

ならば、

ならば、せめて僕がこいつを救いたい。

「…絶対に見つからない、だから連れて行ってくれ。」

「…。」

華梁が僕の目をじっと見る。僕の考えをはかりかねているようだ。

「…俺が、こいつの母親を殺した。」

だから、

「俺は、こいつを救う義務がある。華梁にだってそれは任せたくない。…俺の責任なんだ」

僕がそう言つと、華梁は少しだけ驚いた顔をした。

そして…心なしか表情を緩めた。

「…しょうがないな。」

ため息まじりにそう言った後、華梁は僕に背を向けた。

「…見つかるなよ。まあ、さっきの戦い方を見ると足手まといにはならんだろうがな。」

一緒に行ってもかまわないということだろう。

僕は、歩き出した華梁の後を追った。

「…やっぱり、お前はけだものなんかじゃないさ。」

ぽつりと、華梁がそう言ったのが聞こえた。

## 十三話 自嘲

村では、どの家からもすすり泣く声が聞こえていた。  
外を歩く者いない。

ただただ古びた家屋の中から、故人を思う泣き声が聞こえてくるだけである。

僕の記憶では村はこんな所では無かった。  
貧乏ながら活気にあふれ、威勢の良いかけ声や、子供達の笑い声が聞こえる、そんな村だったはずである。

…ここは僕が、少しだけ住んでいた村だ。一月くらいの間だったろうか。

素顔を見せることが、僕の日常を壊す原因だと知っていた僕は、ひたすらそれを隠し、平穏な日々を過ごしていた。

だが、ある日、簡単に崩れたのだ。

…今考えてみれば、軽い冗談だったのだと思う。

良くしてくれた酒屋の主人が、僕の間を突いて面をとったのだ。  
きつと僕の顔に傷ややけどの痕があつて、それを隠すために面をつけてるとでも思ったのだろう。

あまり心を開かない僕を思つて…そんなもの恥ずかしがる必要は無い、と、そう言いたかったのかもしれない。

…今となつてはもう分からない。

結局、素顔を見られた僕は化け物扱いされた。



華梁は、家族の亡くなった家に入り経をあげている。  
きつと、あの子の家を探すためだ。

通りがかりの僧です。この村でたくさんの人が亡くなったと聞きました。供養のため経を上げさせていたきたいのですが

聞き慣れない「僧」と言う言葉に、村人は首をかしげたが、華梁に悪意が無いことと、亡き人の供養をしてくれる事に感謝され、たいていの家では中に上げてもらっていた。

やはり、聞かない言葉なのだろう。僕も暦縁さんから聞き、初めて知った言葉だったから。

僧か。

暦縁さんに聞いた話だ、海を渡った別の国で、日本とは全く別の考え方が説かれた教があるらしい。

「ほとけ」…とか「しゃかむにぶつ」と言われた人が説いた考え方らしいが（暦縁さん曰く、考え方ではないらしいのだが、僕はよく分からなかった。）こちらの国では、あまり聞かない教だった。

ここの国で信じられている教は、もっぱら「神」が中心で、教とは「神を崇め奉る」というのが常識だった。

それ以外の教というようなものはあまり伝わっていない。神を信じ

るか、信じないか、という二種類の人に分かれているだけである。  
（一応は、伝わっているらしいがひどく一部の人が知っているくらいなのだそうだ）

実際に僕も、「神社」という建物は知っているが、寺という建物は  
暦縁さんに出会って始めて見た建造物だった。

暦縁さんからその「教」<sup>おしえ</sup>を聞いていたが、僕にはなかなか理解することが出来なかった。結局最後まで曖昧なまま、暦縁さんのもとを  
離れてしまった。

首をかしげている所を見ると、村の人々も僕と同じだったらしい。

今、華梁が家に入れてもらっているのも、人柄のおかげなのだろう。

僕はというと、もっぱら家の陰に隠れて行動していた。

村人に見つからないよう…慎重に…

すすり泣く声を聞きたくなくて、ずっと耳をふさいでいた。

僕はまだ…自分の罪と、向き合う事が出来ないでいるのだ。

華梁は二、三軒の家を周り、「あの子供の家が分かった」と言った。

「あそこの家だ。」

華梁の視線の先には、小さな茅葺きの家が建っていた。

華梁は入り口に立ち、扉を開けた。

ひどく…空気が薄く感じた

この家のだけ何かが禍々しく淀んでいる気がする

中には膝を抱えた浅黄色の子供がうずくまっていた。

「…だれ、ですか？」

心底、現れた人間に興味がなさそうに、それはそう囁<sup>ささ</sup>った

「お前を、救いに来た」

おもむろに、華梁が言った。

「救い、に？」

「そうだ」

・・・。

「どこに、救いがあるといるのですか？」

「救いは、いつもお前のそばに有る。」

ふふふ

子は自らを嘲り嗤った。  
あざけ わら

気休めなど、必要有りません。

僕の救いは、ただこのまま眠ったように死ぬ事だけです。

望みは、ただそれだけ。

か細い声で、そう言った。

「救いがそばに有る…その通りかもしれせん。」

華梁に向かい、立ち上がる。

「死は、ここにある。あなたが僕をこの場で殺してくれば僕は救われるのです」

さあ。

両手を、広げた。

救えるのなら、僕を救ってください。

子は瞳をゆっくりと閉じた。

「だが、今のお前を救うことは無理だな。」  
ぴくり、と、肩をふるわせた。

「…どうしてですか？」

「簡単だ。お前は、救われることをあきらめているからだよ。」

「何ですって？」

「死が本当に救いだと思うのなら、なぜお前はさつさと死なないんだ？なぜうじうじと今まで膝を抱えていたんだ？」

それは、

「お前自身が、死を本当の救いだとは思っていないからだ。」

「……。」

## 十四話 求道

「それは、逃げだ。お前はこれ以上自分が苦しみたくなから。死という魅力的な概念にあこがれを抱いているだけだ。」

「・・・そのの」

何が悪いって言うんだ！！

しん、と

辺りが静まりかえった。

「ああそうだ、これは逃げだ！僕はこれ以上苦しみたくなから、これ以上傷つくのがつらいから・・・だから死にたいだけなんだよ！ああそうだ、そうだとも！お前に何が分かる！僕には、僕にはたった一人のお母さんだったんだ！飲んだくれても厭しくても大好きだったお父さんだったんだ！それが・・・こんな理不尽で、こんなにあっけなく死んでしまった・・・僕が、何をした・・・何にも悪いことはしてない。この苦しみも分からないお前に」

なにが、分かる・・・

そう、つぶやくように言って、力尽きたように倒れ込んだ。

「何も分からんさ。俺は、お前じゃないからな。」

だから、

お前はお前自身で自分を救って見せる。

華梁は言い放った。

「どうすれば・・・いい。」

「それじゃあ・・・答えを教えてやる」

華梁は大きく手を振りかぶり、

ぱあん

子の、頬を叩いた。

「・・・何を」

「これが、答えだ。」

「どういう意味だ・・・？」

「これ以上の意味なんか無いさ。説明を加えればそれは全て蛇足になる。これが、救いの本当の姿だよ。」

「分からない・・・あんたが何を言っているのか・・・」

「・・・分からないのなら、悩め。本当に救われないのなら、考える。・・・自分自身の足で苦しみが無くなる方法を求めてみる。悩むと言う行為もまた、自分自身が救われるために行とことだ。決して、悪いことではない。お前が求めるのなら、俺は救いの方法を教えるのを拒まない。全てを包み隠さず教えよう。」

悪人でも罪人でも、

つらい人でも悲しい人でも

足が動かない人でも、目が見えない人でも、

自分に自信がない人でも、

生まれつき人より能力が劣った人でも、

体の全てを失ってしまった人でも、

過去に大罪を犯してしまった人でも、

全ての人に等しく救いはある。

だから・・・

救われたければ、

本当に救われたいのであれば。



必死で、救いを求めろ。

香泉寺は救いの道を求めるものは拒まない。

救われたいと思ったのならば…

いつでも門をくぐり抜ける

「香泉寺の山門は、常に開いているぞ」

そう言って、華梁はきびすを返した。

## 十五話 「時」

僕たちは、村を出て、元来た道を戻り始めた。

「なあ、華梁。」

「なんだ？」

「さっきの言っていたことは、本当なのか？」

悪人でも罪人でも、

つらい人でも悲しい人でも

足が動かない人でも、目が見えない人でも、

自分に自信がない人でも、

生まれつき人より能力が劣った人でも、

体の全てを失ってしまった人でも、

過去に大罪を犯してしまった人でも、

全ての人に等しく救いはある

過去に大罪を犯してしまった人でも

それならば…

俺も・・・

「俺も、救われたいと思ってても良いのだろうか？」

ずっと、曆縁の元でもずっと…

僕には罪悪感があつた。

人を、たくさん殺したのだ。

幸せだった人もいただろう。

生きるのが楽しかった人もいただろう。

つらかった人もいただろう。

そしてそのつらさを乗り越えようと必死でもがいた人もいただろう。

僕は、その人達を、そんな人達をこの手で殺めてしまったのだ。

そんな僕が・・・そんな僕など、救いを求めるといふ行為すらおこがましい。

でも、それもまた、幸せになる事から目を背けた事。

自分自身で、幸せになる事を放棄している。

逃げていた、と言うことだ。

全ての人に救いが有るのなら。

僕の目の前にも、救いの道があるのかもしれない。

「こんな俺でも・・・救いを求めても良いのだろうか？」

救われても、良いんだろうか。

「もちろんだ。」

迷うそぶりを見せずに、力強く華梁がそう言った。

「本当か？」

「本当だよ。」

「ならば」

俺も、救いを求めたい。

静かに、時が流れ始める。

それは十の頃、自ら、進むことをあきらめてしまった時間だった。

どうやら、

こんな僕でも救われてもいい世界があったらしい。

「華梁」

「なんだ？」

「少しだけ・・・ここで待っていてくれないか。」

「どこへ行くんだ？」

「また、あの村へ戻ってくる。」

救われてもいいのなら。

俺のやった行為に、けじめをつけねばなるまい。

「そうか。」

華梁は、僕の意図を読み取ったのか、にこりと笑った。

「行つてこい。憂。」

僕は、力強くうなずいた。

## 十六話 一筋の光明

村に、着いた。

まだ、村人のすすり泣く声は途絶えることはない。

この声が無くなる事は、あるのだろうか。

まるで、止まってしまった物語を繰り返しているような・・・そんな気分になる。

物語が止まれば・・・当たり前のことだが、何度見てもその場面から先に進む事はない。

それでも、物語が進むことを望み、見続ける。

その行為意味は無いことは分かっている。

物語を進める事が出来ないのならば・・・僕らはただただそれを見続ける事しかできないのだ。

以前の僕もそうだった。

十の時、僕は先へ進むことをあきらめてしまった。

その場に・・・止まった場所にとどまることが精一杯だったからだ。

前進するのが怖かった。

だから僕の内側の「時」を進めようとするもの達を殺し続けた。

後退するのが怖かった。

だから僕の内側の「時」を乱そうとするもの達を殺し続けた。

臆病で、今の自分を守り続けるために人を殺した。

現実の時間は常に流れつづけている。

・・・が、

僕の内側の「時間」は十の時から止まったままだ。

自ら、「時間」が進むのを拒んでいたのだ。

進めば、取り返しのつかない場所まで行ってしまっ、と根拠もなく  
そんな不安を抱えていた。

でも、それは間違っていた。

ようやくわかった。

今の自分に固執したところで・・・残るのはただのむなしさだけ。  
それならば、死んでいるのと一緒に。

進まなければ、何も始まらないのだ。

だから、僕は

拳を、握りしめ、

大きな声で、

自分の出せる精一杯の声で、

叫んだ。

僕の行った行為に対しての  
謝罪の、言葉だった

声がかれるまで、あやまり続けた。

嗚咽のように叫び続けた。

やがて、人が集まって来る。

なんだ？お前は・・・

・・・おい。

こいつだ。

この化け物だ。





化け物だ化け物だ化け物だ化け物だ化け物だばけものだば  
けものだばけものだばけも

のだバケモノダバケモノダバケモノダ・ ・ ・

なじる

泣き叫ぶ声が聞こえる。

誰かが僕を殴りつけ、

そしてそれは次々と波紋のように広がり。

気づけば村中の人々が僕を殴っていた。

棒で叩く人も現れた。

石を投げつける人も現れた。

それでも……僕は、あやまり続けた。

やがて枯れた声も出なくなり、口を動かすだけとなっていた。

それでも

僕は、それを止めなかった。

止めたくなかった。

止めれば、自分がくじけてしまいそうだったからだ。

せっかく進み始めた時が、再び止まってしまいそうだったからだ。

気がつけば、もう夜になっていた。

やがて、僕を殴る人も減り。

周りには、人がいなくなっていた。

意識が・・・ぼやける。

がんばったな。

人の声が、聞こえた。

もう目は腫れ上がり、声の主の顔が見えない。

よく、耐えたな。

僕は、ずっと悩んでいた。

だけど、自分自身が罪を認めるのが怖くて、ずっと目を背け続けていた。

でも、それは、ただ逃げただけだった。

まず、自分の罪は自分自身で悔いなければならない。

なあ

「<sup>ぼく</sup>僕は」

声の主に向かって、そう尋ねた。

それは、初めて口に出した、素直な言葉。

僕は、・・・救われるために努力しても良いのだろうか。

「・・・ああ。」

救ってやる。

だから。

だから、お前は。

誰よりも、幸せになれ。

僕の頬に一筋の涙が流れた。

手を、さしのべられる。

僕はその手を強く握りしめた。

永い、闇の路のりだったけど。

ようやく目の前に、一筋の光が差し込んだ気がする

ふわりとした浮遊感。

暖かい、手の平の感触。

僕は声の主に抱きかかえられた。

「香泉寺へ帰ろう。」

暖かい、華梁の声だった。

## 初話 夢の追憶と物語の始まり

これは、夢か。

記憶は曖昧。

僕は、竹林を駆けていた。

手で、足で、獣のように地を蹴り上げながら。

これは、どれほど前の記憶だろうか。

いや、

僕の手にはもう、地を駆ける感触と、人の首を効率よくかき切る技術しか持ち合わせてはいない。となると、いつの記憶かということを探るのは問題じゃないのかもしれない。

ただ、地を蹴り、前へと進んでいた。

追っ手に追われていたのかもしれない。

それも、いつもの事だ。

ただ必死に地を蹴り走っている。

不意に、視界が開けた。

目の前にはこじんまりとした庵が立っていた。

濡縁に一人の男が座っている。

黒い、法衣を着た男。整えてあるのか無いのか分からないぼさぼさ頭。

「なんだ？狐か。…いや人か。」

のんびりとした口調でそう言った。

「そんな所で、なにをしてるんだ」

男は濡縁から立ち上がり、ゆっくりと歩み寄ってきた。

人の言葉など忘れてしまった頃だ。

僕はうなりながら、男を威嚇した。

「ほら、ここに来たのなら客人だ。上がって茶でも飲まないか」

そう言った。

はじめ、男が何を言ったのか分からなかった。

客人？

上がってこい？

けどものの僕に向かって？

何を考えてるんだ、こいつは。

僕が、怖くないのか。

「ほら」

男が手を伸ばす。

危害が加えられると思い、僕はその手にかみついた。

男は少しだけ顔をゆがめたが、すぐにさっきの飄々とした表情に戻った。

「…おいおい、何をしてる。お前はれっきとした人間だろう？それ  
はけどもののやることだよ。」

「…！」

人、と

男は、僕のことをそう言った。

人として、接してくれた。

僕は人と認められた。



僕は噛みついていて男の手を離した。

「お・・・れは」

久しく忘れていた人の言葉。

「人…なのか？」

僕は男にそう尋ねた。

「当たり前だろう」

男は即答した。

「さ、人となれば客人だ。客人を外に放っておくのは気が引ける。入ってくれ。うまい茶と菓子があるぞ。」

につこりと笑って男がそう言った。

子供のような無邪気な笑顔だ。

思わず頷いてしまった。

そのとき、僕の来た方向から、一人の男がゆっくりとした足取りで現れた。

追ってきた、という様子ではない、

が

この場所は、来ようと思って来れる場所ではない。

人里から離れすぎているのだ。

しかも、

僕はこの男にも見覚えがあった。

待ち伏せ、された。

そのときはそう思った気がする。

とっさに僕は近くの物陰に姿を隠した。

彼の顔は覚えている。こいつとは過去に、何度も会っている。

これは

とても恐ろしい、いやな思い出だ。

## 初話 思いと存在の境界

その男は黒い水干を着ていた。

歳は若い。三十はまだ超えていないだろう。一見柔和な顔をしている。

ただ、その瞳はぎらぎらとやけに印象的に僕の目に映った。

「あなたははこの庵の主人とお見受けしますが、この辺りに変わった獣を見かけませんでしたか」

よく通る声で水干の男が尋ねた。

「獣？」

「ええ、獣と言っても見かけは人。ただ心がけだものなのです。先も近くの村人の首をかき切って逃亡しました。」

びくり。

背筋が凍る。

「見かけませんな。ここには私と客人しかいない。」

「…客人？ですか。」

「ええ、そうです。あなたもこの庵の客人ですか？」

「いえ、私はその狐を追って来ました。」

「ならば、おかえりください」

ぴしゃり、と法衣の男はそう言った。

「ここは招かれざるものが来るところではない。」

追い打ちをかけるように、法衣の男はそう告げた。

「…ほう。」

水干の男は、挑戦的な目で、法衣の男を見た。

「…ふむ、この竹藪の庵、来たときから気になっていた。もしかあなたは暦縁というお名前ですか？」

「いかにも」

「ふむ、名高い暦縁殿がそう言うのでは間違いは無いでしょう。こちらの勘違いでした」

男は深々と頭を下げた。だがその態度には僕には謝る態度はみじんも感じられなかった。

禍々しい、いやな空気。

「…もしもそのような姿の獣を見かけたらご一報ください。私の名は、霊元と言います。客人  
がいるというのにお騒がせし誠に失礼いたしました、」

では、と

不敵に笑い、霊元は踵を返した。

「ああ、それと」

思い出したかのように顔を法衣の男、曆縁に向けた。

「見つけたら間違っても関わろうとは思わない方がよろしい。あれは獣。人の心など持ち合わせてはいないのです。」

「親切な忠告、感謝します」

「では」

そう言つて元来た道を歩き出し、やがて暗闇に溶け込むようにしていなくなった。

「おい、もうでてきて良いぞ。」

「…なぜ助けたのだ」

「おもしろそうだったからな」

「は？」

「丁度話相手が欲しかったんだ。茶もあるし手頃な菓子もあるが、話相手がいない。さて、どうしたものかと思つてた時にお前が飛び込んできたんだ。」

…それだけ？

「それだけだよ」

よく分からないが、とんでもなく変わった人だ。

「とにかく中に入れ。着替えの衣を持ってきてやる。風呂場においてくから好きにきがえろ。」

言われて気づく。

僕の姿は血だらけだった。

この姿を見ても、この人は顔色一つ変えなかったのか？

…何者だろうか、この人は。

「私の名前は暦縁。…ん、まあ呼びやすい呼び名で呼んで良いぞ。」

まるで僕の考えを見透かしたようにそう言った。

「で、お前の名前は？」

暦縁さんが聞いた。

名前？

僕の…名前

何と呼ばれていたか。

けだもの。

野狐。

白蔵主。

いや、

ずっと昔、僕にはちゃんと名前があったのだ。

なんと呼ばれていたか。

たしか

そう、僕の名前は。

「…憂」

小さな声で、そう言った。

## 月夜の会合

暗い森の中に一人の男が立っている

男は、月を背に飛ぶ、鳥の様なものを、じっと眺めていた。

やがて、二人の男が現れる。

僧形の姿の男と、奇妙な狐面。

狐の面をかぶったものが、鳥の様なものを空から打ち落とした。

にたりと嗤う。

やはり、楽しませてくれる。

そうつぶやいた。

二人の男が去った後、

静かに、男が鳥の様なものの前に、歩み寄った。

じつとうずくまったその姿を眺めながら。

…お前は失敗作だなあ。

そう、言った。



お前くらいに奴を恨んでいるのなら、ひよっとするといけるかと思っただがね。

いやはや、期待はずれだったよ。

そう言つて、男は鳥の様なもの…子を蹴り飛ばした。

「ぐ、」

短くうなり、子は動かなくなった。

男の口元が、つう、とつり上がる。

嗤っているのだ。

「おもしろいな。恐怖という感情は、あそこまで狐の理性を無くすことが出来るのか。」

く

く

く。

心底可笑しそうに、声を押し殺して男が嗤った。

黒い、水干を着た男だった。

「多少は、面白くなりそうだ。」

子は、いつの間にか消えていた。

その虚空を見つめ、男は言った。

…なあ、暦縁？

お前は、奴をどうするつもりだ？

華梁とか言う、若造に任せ、お前は奴に何を学ばせるつもりだ？

無駄だ

無駄だ。

なあ暦縁？

お前も、退屈なのだろう？

所詮、生とは暇つぶし。

生きるというのは退屈そのものだ。

お前も奴を使い暇を潰したいだけなのだろう？

なあ、暦縁？

お前はあの狐に何を求める？

何を見いだす？

無駄だ。奴は何も出来ない。人は単独では生きて行く事は出来ない。

奴は、獣でも、人でもない。

いずれ何もかもに絶望し、落ちて行くだけだ。

巨大な、憎しみと力を持ちながら。

見てみたいとは、思わぬか？

か

か

か。

嗤う。闇の中に男の嗤いが、こだまする。

そのとき、

…ざり。

背後で音が鳴った。

## ひとにあらざるものたち

「誰、ですか？」

水干の男が、ゆっくりと振り向く。

そこには、仙人のような風貌の、男が立っていた。

「なに、ただの老いぼれのじじいだ。木の上で眠っていると、妙な声が聞こえてきての。気になって降りてきたのだ」

男は少しだけ、動揺した

気配が、無かったのだ。

多分、音を立てたのもわざわざこちらに存在を気づかせるためだろう。

ただの老人ではない。そう思った。

仙人…

聞いたことがある。

仙人のような風体でこの辺りに住んでいた老人。

でもあれは、

三百年近く…以前の噂だったはずだ。

…否、あれは噂ですらない。

ただの…おとぎ話だったはず。

「で、おぬしの独り言に「暦縁」と名前がでてきたような気がするが？」

こいつが、その本人なら…

「暦縁に…何か用かの？」

鋭い眼光で、老人は男を威嚇した。

…。

間違いない。

こいつは。

男は、衣を正した。

「…人の身ですらないあなたが、何故人の身をなど気にするのですか？」

男がそう言うと、老人はにたりと笑った。

「…おぬしこそ、俺と同じにおいがするのお。人の身じゃないのはお互い様だ」

そう言って、声に出して、

ふお

ふお

ふお。

老人は、わらった。

…もう、間違いない。

いやな汗が男の頬を流れた。

この相手は、格が違うのだ。

「あなたなら、分かる苦しみのはずです。私たちは命の時間が長すぎるのです。これは、言うなれば娯楽。これくらいのは…」

「たわけ」

一括された。

「我らは人には関わらぬものだ。それが我らでありそれ以上もそれ以下でもない。」

老人は厳しい口調でそう言った。

「人が人であるように、我らも我らとして生まれてきたのだ。…それ以上を求めればお前はたちまちに消える。世は全て網の目のようにつながっているのだ。それぞれに役目が有る。我らの役目は「ただそこにいる」…これだけ。それ以上のことはするな。やればいずれ…世の理に消されるぞ」

わかつては、いるつもりだ。

網の目の中から外れれば、それは、いらぬもの。

我々が人と関われば、網の均等は崩れる。

網の均等、すなわちその網がほどこた一部分。

それは、放っておけばいずれ全てを崩す。

だから、理は

崩れる前に…それを切り取る。

つまりそれは、俺という存在が輪廻から外れてしまふと言うこと。

…だが、

それこそが俺の求めている死だ。

俺は、ただただ、死という永遠の安楽を求めているだけなのだ。

その手段を退屈しのぎにしているだけ。

俺は…死にたいのだ。

永遠の命などいらない。

ただ安心を、得たいだけ。

「…私は、消されても良い。私は、もう」

生きるのに、飽きた。

「暦縁はな、」

唐突に、老人は男の言葉を遮った。

人の身でありながら、我々という呪を超えおったのだ。

そう、言った。



ことほりをとなづもの

「…何ですって？」

「千年以上生き続けている俺を、奴は諭しおったよ。たいしたもんだ。」

「…まさか。」

「…俺もお前と同じように死を選ぼうとした事がある。ごく最近のお」

この身でありながら人と関わり、理に消されようと思ったのだ。

あのとき、俺を消そうとしたのは、荒涼神と言う妖だった。

「…荒涼神」

聞いたことがある。

あれも、狐のように初めは人だったものが化生に変わったもの。

荒涼神に消されそうになった俺を、やつは救いおったのだ。

そう、老人は続けた。

あれから、十年たつ。

まだまだ若造だった奴に、この俺は助けられた。

「あなたがいなくなっても、世に綻びが生まれますよ」  
「なに、安心はいつもあなたのそばに有る。」

そう、暦縁は言ったのだ。

荒涼神も、憂と同じ、理に反したものを消すために生まれたもの。

世の均等を保とうとして生まれたもの。

「…まさか、あの狐も荒涼神と同じと言うのですか？」

「まあ、奴はまだ迷っておるがの。あんな姿になっても、人として生きたいらしい。」

「ならば、奴が目覚めれば…。」

「お前が消えるか、奴が消える。当然暦縁はそれを知っている。そして、それを止める方法もな。」

「止める、方法？」

「ああ」

いらぬ、世話だ。

俺は、生きるのに飽きた。我々は肉体が死滅する事はない。ならば、その理とやらに消されるのを待つしかない。

そのとき

「…暦縁は、俺に安心をくれた。生の苦しみを取り去ってくれた。いや初めからそんなものは無かったと気づかせてくれたとでも言うのかな」

老人は、ゆつくりとそう言った。

呼吸が、止まる思いがした。

安心を、くれた？

出来る、はずがない。

永遠に死など無い我らの身に、安心など無い。人は死が有るからこそ生きられるのだ。それはこの八百年の内に学んだこと。安心は俺が、どうしても得られなかった事なのだ

それが、

たった、十数年生きただけの暦縁が、得たとでも言うのか？

あり得ない。

「…嘘です」

「本当だ。」

「…あり得ない」

「本当だ」

ならば…

「ならば、俺が求め続けた八百年は何だったというのだ!!」

声を、荒げた。

「俺は、それを求め続けたんだ、だが結局、永遠の生は苦しみしか生まないことを知った! だから…理から外れようとしたのだ。それ以外の方法が無かったから…それなのに、たった十数年生きただけの糞餓鬼が、それを、得た? ふざけるな! それならば…」

俺の苦しみは、何だったんだ?

声に、ならなかった。

分からない。

分からない。

それは、激しい嫉妬と、虚無感。

それならば、なぜ、俺には分からなかったのだ?

あれほど苦しみ抜いたのに。

あれほど思い悩んだのに。

それが全て無駄?

十数年生きた餓鬼にでも分かったことが、俺には分からなかった？  
あり得ぬ。

それは、その事実は俺の八百年を…否定している。

俺は、それだけを求めていたのに。

ぐらりと、目眩がした。

「…は、どのみち私は生きるのには飽きたのです。」

負け惜しみのように男はそうつぶやいた。

「好きに、させてください。これは私のなりの考えがあつての行動です。」

男がそう言つと、老人は不敵に笑った。

「まあ、俺は何もせんよ。成り行きを見届けるだけだ。何、今はただのお節介。お前の邪魔するつもりは無いし、価値をお前に押しつける訳でも無いのでな。お前の好きにするがいいさ」

そう言つて、踵を返す。

「…俺が、今曆縁に関わっているのは十年前の後始末のためだ。華梁も同じ。そして、憂ともな。それ以外は興味ない」

つぶやくように、そう言った。

そして、静かに、老人はその場から立ち去った。

姿が見えなくなった後、男は地面に崩れ落ちた。

慟哭のような泣き声が、静かに、延々と夜の森に響き渡っていた。

## 第零話 現状公案

### 序文

かのたき木、はひとりぬるのち、さらに薪とならざるがごとく、人のしぬるのち、さらに生とならず。しかあるを、生の死になるといはざるは、仏法のさだまれるならひなり。

このゆゑに不生といふ。死の生にならざる、法輪のさだまれる仏轉なり。このゆゑに不滅といふ。

生も一時のくらゐなり。死も一時のくらゐなり。

たとへば冬と春のごとし。

冬の春となるとおもはず、春の夏となるといはぬなり。

（道元 著 正法眼蔵 現成公案より抜粋）

僕は、今が永遠に続いてほしかったのだろうか？

静かな、秋の夕暮れだった。

香泉寺から見える風景も、少しずつ秋のそれに変わり始めている。

紅葉した葉が、ちらちらと空を舞っていた。

それが部屋の中にも幾枚が入り、ゆっくりと畳の上に落ちる。

それは少しだけ幸せな日常の風景。

僕は、最後の食材を置き、居間に向かって声をかけた。

「華梁、夕飯の支度が出来たぞ。」

「おお、すまん。して、今日の料理は何だ？」

「焼き魚。」

「く……お前は焼き魚以外の料理は出来ないのか……というか、お前の焼き魚は料理じゃない。ただの焼けた魚だよ。工夫も凝らしてないだろ……火の前に魚を置いただけだ。」

「でも、旨いだろ？」

「所々が生焼けだ。」

「そこが旨いんだ」

「……う、やっぱりお前の嗜好はわからん……。」



華梁の元へ来て一年が経った。

この香泉寺の生活も、ようやく慣れてきた所だった。

相変わらず、この狐の面はとれないけれども、僕はそれなりに充実した日々を過ごしている。

朝起き、食事の準備をする。昼食までに食材を集め、料理し、夕方までにまた夕食の食材探し。開いた時間は香泉寺の掃除。それだけの日常だ。

それでも、僕には新鮮だった。

逃げるように生きていた僕にとっては、少なくとも充実した時間だった。

ここには、ただの日常がある。

本当に・・・かけがえのない日常だ。

ここには華梁がいて涼美がいる。

この二人は、家族だ。

それは僕が十の時に無くしてしまった物だった。

「そんなこと言っても、ほら、涼美は美味しそうに食べてくれているぞ。」

「いや、美味しそうと言うか・・・思いつきり無表情なんだが・・・なぜそんなに無表情で食べられるのか不思議なくらいに。」

「それだけ、美味しいってことだろう。」

「お前のそのめでたい思考もよく分らん。」

「涼美、旨いか？」

「……………」

こくこく、と無表情で頷く。

「ほら。」

「……もしかして、俺の舌がおかしいのか？」

だが、

俺は、まだ救いを求めている。

今の日常は確かに楽しい。

いつまでも続いて欲しいと思うほどに。

だから、……この生活が壊れてしまうのが恐ろしかった。

「今」という物はない、と華梁に教わった。

それは「今」と言った瞬間にすでに過去になり、そのときの今は終わってしまっているからだ。

時は常に進み続け、とどまる場所が無い。  
唯一、あるとすれば、それは己の頭の中だけ。

暦縁さんにも教えてもらった。

そのときは、床を酒の杯でこつりとたたき、音を出していた。

音は、発した瞬間に全ては終わっている。杯でたたいた事実もその瞬間で終わっている。

世は、「杯でたたいた」という事実何一つ残してはいないのだ。

が、僕の頭の中ではその事実をを覚えている。

もしもその衝撃で杯が割れれば、「元は割れていなかった杯が床を叩いたために割れてしまった」と思うだろう。これも間違っていない。

しかし、その場には、割れた杯しか残っていないのが事実だ。

「割れてはいなかった杯があった」という事実も、「床をたたいた」という事実も世にはまったく残っていない。ただただ割れた杯がその場に残っているだけなのにもかかわらず、頭の中で、「杯が割れてしまった」と思ってしまう。

人の悩みの原因もまた、それと同じだと教わった。

いやなことは、いやなことがあった瞬間に全て終わっている。

だが、人はそれを記憶し、記憶の中で反芻する。

いやなことがあった瞬間には、苦しみもあるだろう。

でもそれ以上の苦しみは、完全に自分自身の頭で自分自身が起こしている事だけ。

いやなことがあった瞬間は、全て終わってしまっているからだ。

華梁から聞いたとき、悩みとはたったそれだけの事なのか、と肩すかしを食らった。

それを華梁に話すと、

「頭で理解するだけなら、誰でも簡単に出来るさ。」

大切なのは、その事実を己の中で本当に受け入れること。

それが出来なけりゃ、こんなのはただの知識止まりさ。

そういつて、意地悪くにやりと笑った。

そうなのだ。

僕も、いつかこの生活が無くなったら、と考えると、ひどく恐ろしくなる。

「時」は決してとどまることは無いというのに。

そして、それは「今」起こっている事実という訳でもないのに。

頭の中で、それを不安に思っている。

心を、痛めているのだ。

・・・結局、僕は、何も分かっていないのだ。

「じゃあ、また少し出てくる、華梁。」

「こんなに遅く、どこへ行くんだ？」

「明日の食材探し」

「わざわざ今から出なくても良いだろう？もう外は暗いぞ。食材ならもう少しくらいなら残ってるだろ？」

「いや、さっきまでは残っていたんだが。」

「どうしたんだ？」

「涼美に食われた。」

「涼美いいい！！」

「…まあ、食後の散歩だ。行ってくる。」

「・・・ああ、すまん。って、涼美は残った皿を名残惜しそうに

見るな。そんな顔しても今日はもう料理は出ないぞ。」

僕は苦笑して、香泉寺の外に出た。

## 第一話 道の始まり

山門をくぐり抜けた時にふと立ち止まり、仰ぎ見た。

古ぼけた荒れ寺の山門には、真新しい字で香泉寺と書かれていた。

僕がこの寺に来たときに華梁が書いた物だった。

香泉寺、と言う名には、由来があると華梁が言っていたのを覚えている。

この信仰が盛んな国では、教えを香に例えられるらしい。

香という存在自体が、教えの本質に似ているから、なのだそうだ。

例えば香の香りを衣服にしみこませれば、香から離れてもその香りは衣服に残るだろう？ 修行者は教えを一度聞けば、例え寺の中じゃなくても教えを実行できる。そんな意味合いを込めたものだ。

そう、華梁は言っていた。

香が、泉の様にわき出る寺。

「俺は、暦縁さんの教えを広めたい。だから香が泉の様にわき出る寺と、暦縁さんの教えをたくさんの人に広めたいと思ってこの寺をそう名付けたんだ。」

「今は、涼美と憂だけだ。だけど、いずれ。たくさんの人でにぎわう寺にしたい」

先は、長いけどな。

そう言つて華梁は笑つた。

僕も、出来ればその夢を叶えてあげたい。

そのためには、僕自身が救われていなければならない。救いとはどういふ物かと言つことを分かつていなければ、人は救えない。

そして、

人を救う事が出来れば、僕の手によつて苦しめられた人を救うことが出来る。

都合のいい話かもしれない。彼らを苦しめた僕が、彼らを救いたいだなんて。

・・・しかし、僕がたとえ罪の報いを受け不幸になつたとしても、僕の手にかかり死んだ人は生き返らない。不幸になつた人は、幸せになれる訳じゃ無い。僕の行つた罪は過去のものだからだ。

だから、僕は。

精一杯努力して、救われる。

そして、僕が得たものを他の人にも伝える。

僕の話聞き救われた人がまた人に話せば、その次の人も救われる。次の人も話せばその次の人も救われる。



そうすれば、たくさんの数の人が救われる。

この一生を、他を救う事に捧げたい。

そう、思ったのだ。

## 第二話 再び進み始めた時間

滝壺にたどり着いた。

香泉寺の近くにある、大きめの滝壺。僕はここでよく食事のための魚をとる。

盛大に落ちる水が、しぶきをあげている。

岩下に手をやり、昼間仕掛けた魚取り用の罟を試みるが、魚はかかっていないようだった。

「・・・しょうがない、素手で捕まえるか。」

一人で生活している時は良くやっていたことだ。性質が獣なのか、取ろうとおもえば魚でも山の獣でも簡単にとれる。

そうか。

良く考えれば・・・この能力のおかげであまり空腹にはならずにするんだ。

もしかすると、今日まで生きられたのも、この能力があったからなのかかもしれない。

ゆっくりと、自分の顔をなでてみた。

すこしだけ口元に笑みがこぼれる。

不幸というのも、考え方次第で変わるものなのだ。

そう思うと少しだけ気持ちが楽になった。

半刻ほど魚を捕ると、明日の朝食に使うのには十分な量になった。

あとは、山菜でも採っていくか。

見れば、日は大きく西に傾いている。

もうじき帰らなければ帰り道が困難になるだろう。

もう少しくらいなら大丈夫か……。

そう思い、僕は顔をあげた。

谷に生えた楓の下に、

見覚えのあるものがあることに気がついた。

それは、ひどく楽しそうな眼で僕の方を眺めている。

直感する。

僕の、幸せな時間は、

今、終わったのだと。

今、何て物はない。

そう、思っていたのに・・・

そう

時は簡単におわりを告げるのだ。

楓の葉が舞う木漏れ日のしたに

皮肉なほどに、同じ姿で

浅黄色の衣の子が、立っていた。

### 第三話 闇との再会

にい、と、それは唇を吊り上げた。

「きつね」

そう、子はつぶやいた。

きつねきつねきつね。

楽しそうに、けらけらと嗤う。

「やっとみつけた」

「ぼくのおとうさんとおかあさんはしんじやったのに」

「おまえはなんでいきてる」

「おれがふこうなのにおまえはなんでいきている」

「なんでわらってる」

言葉が出ない

けらけら

けらけらけらけら

けらけらけらけらけらけらけらけらけらけらけらけら  
けらけらけらけらけらけらけらけらけらけらけらけら  
けらけらけらけらけらけらけらけらけらけらけらけら  
けらけらけらけらけらけらけらけらけらけらけらけら  
けらけらけら

嗤う

嗤い声がこだまする。

なぜ、嗤ってる・・・？

なぜ、そんなに楽しそうに嗤っている？

殺される、と思った。

「おま・・・え。」

かろうじてしわがれた声を出した。

「ゆるせない」

表情が消えた。

「おまえがぼくのおとうさんにしたことと、おなじことをしてやる。」

ゆらりゆらりとこちらへ歩み寄る

歩み寄る？

・・・今の彼は飛んでいない。

彼は、僕を捜すために、望みを空に託した。

飛ばない、彼は・・・

今度は、何を望んだのだろうか？

見れば、彼の手の平は。

暗い闇の色へと化していた。

「絶望と後悔の狭間で苦しめ。罪深き狐よ。」

そう言って、

僕の胸を突いた。

嘘のようにすんなりと僕の胸に突き刺さる手の平。

血が・・・吹き出る。

意識が、遠のく。

これが・・・僕の死？

死ぬ・・・のか？

いやだ。

いやだ！

だって・・・

僕は、まだ何も分かっていないじゃないか・・・！



#### 第四話 崩れゆく意識の中で

お前さんは、ここにくたばるのは、ちと早すぎるんじゃないかの？

不意に・・・誰かの声が聞こえた。

「お前さんにはまだ役目がある。」

聞き覚えがある。

「人に関わると俺も危ないのだがな、今回限りだ。」

この声は

「方・・・千！」

「ほお、覚えておったか。久しいのお、一年ぶりだな」

崩れ去ろうとする僕の体を、方千が支えた。

「よく狐を出さずに理性を保てたのう。」

そう言つて、未だ手を僕の中から抜き出さない子をにらみつけた。

「褒美じゃ、後は任せておけい」

子の、動きが止まった。

「だれ・・・だ」

僕の体から手を抜き、後ずさる。

「お前と同じものだ、が、お前とはちと格が違うがの。」

そう言つて、口で小さく呪を唱えた。

とたんに、がくりと子の膝がくずれ、地面に倒れ込んだ。

「さて、どこかで聞いとるのだろうか？ 霊元よ。」

子に向かい、楽しそうに方千がそう言った

「わしと力比べでもしてみるかの」

ふお

ふお

ふお

方千が、高笑いをする。

と、子が唐突に口を開いた。

「あなたと、力比べをする気は毛頭ありません。」

先ほどまでとはうって変わった口調でそう言った。

「仕方がありませんね、今回は私が下がりましたよ、しかしあなたも、自らが理に消されたく無いのであれば、むやみと人に関わらぬことですよ」

「は、わかっておるわ」

そう言つて、方千はにんまりと笑った。

「・・・ふ、では。またいずれ」

不敵な笑みを浮かべ、子は次第に姿が薄くなり、消えていった。

「ほつ、青二才が生意気な口を聞きおつて。」

笑みを浮かべたまま、方千がそう言い放った。

「さて、大丈夫か？憂」

「・・・ああ」

血はまだ止まっていないが、急所は外れたらしい。

「とにかく、安静にしておれ。近くにわしの住まいがある、とりあえずそこで手当をしよう。」

そう言つて、方千は僕を抱えて森の方へと歩き出した。

## 第五話 呪と思い

気がつくと、崩れかけた様なあばら屋の中にいた。

穴の開いた壁から、外の風景が見える。

夜空に浮かんだ白い月。

そうだ、

あの時、あの子供に出会ったのも、こんな月の夜だったな。

そこまで思い出した所で、僕の頭は覚醒した。

俺は・・・あの子供に、胸を刺されたのだ。

急いで刺された所に手をやると、そこには布が巻かれていた。  
どうやら、介抱された後らしい。

「気がついたか？」

声のした方に眼をやると、方千が杯を持ち壁を背にしながら坐っていた。

「・・・方千」

ここは、方千の家か。

「お前に、あの衣の子がどのようなものか、言っておかねばならぬようだな」

とくとくと、酒を杯にそそぎ、ゆっくりとした口調でそう言った。ふんと、酒のにおいが辺りに充満する。

「お前は、あのようなものを、どこまで華梁に教わった？」

あのような物。

華梁は最初にあれを見て、なんと言っただろうか？

抑圧された人の思い、その姿。

確か、それは・・・

「ひとの・・・思い。」

僕がそう言つと方千は「うむ」と言つて頷いた。

「その通りだ、あれは。人の思いが形になり、この世に生まれ出たものだ・・・故に、本来ならば、実体がない」

実体が、ない？

そう言えば、華梁も『・・・本当は触れる事すら出来ないのだが・・・』と、そんなことを言っていた。

「その通りだ、触れる事も出来ぬし、同時にあちらが我らに触れる事も出来ぬ。」

え？

「それならばなぜ、俺は奴に刺されたのだ」

そうだ、現に傷口はある。実体が無いのであれば、僕に触れる事すら出来ないはずだ。まして、僕の体を貫き通せるわけがない。

「問題はそこだ。」

そう言っ方千は数歩下がった。

「言葉で説明するよりも、実際に試した方が早い」

方千は懷から白い紙を取り出した。

「これを持っておれ」

紙をうけとる、と同時に方千は小さく呪を唱えた。

すると、紙は勢いよく炎を放ち燃え始めた。

慌てて、手をはなす。

紙はしばらく床の上で燃え続け、程なくして消えた。

「・・・何をする。」

「どうだ、熱かったか？」

「当たり前だ。」

見ると、僕の手の平には小さく水ぶくれも出来ている。

「ほう？それはおかしいの」

何故かわざとらしく首をかしげる方千。

「今のは幻の炎だよ。熱さなんか感じる訳がない」

「なに？」

「見る」

そう言つて、先ほどまで紙の燃えていた場所を指さす。

そこは、焦げ目一つもついていなかった。

「どついう・・・ことだ？」

僕は確かに熱さを感じたし、現に水ぶくれまで出来ている。

なのに今のが幻の、炎？

ならば、僕は何故熱さを感じたのだろうか？

「それが、「思い」だ」

「・・・」

「お前は、炎を見て、頭の中で「熱い」という感覚を呼び起こしたのさ。だから実際には熱さが無くとも、体がそれに反応する・・・」

水ぶくれができたのもそのせいだ」

いや、まさか・・・

そんなことが、実際に起こるのか？  
信じがたいことだ。

「思い、の強さはそれほどまでに大きい。・・・病は気から、という言葉もあるがあれは迷信ではない。実際に思いは体の症状にまで表れる。」

お前の、顔のようにな。

そう言われて、思わず顔に手をやった。

さりさりと、顔が半分から獣の手触りになっている。

しかし、これは・・・

これは・・・呪いのせいだ。

「・・・お前が何故、狐の姿になったのかは、俺には分からぬ。がお前も思いによってそうなってしまったは事実だ。この世にはお前らの言っている様な呪いなど無い。実際に手を出さなければ、人を傷つける事など出来ないさ。呪いで操っているのは、人の心だ。」

「人の心？」

「ただ呪いをかけるだけでは意味がない。大切なのは「呪をかけた事実」と「信憑性」その二つが混じり合うことによって、強い「心の不安」が生まれる。それが、呪いの正体だ。」



ならば、

やはりこの顔は、

僕の、心の不安か？

「前にも言ったとおり、それはお前の心の不安が形になったものだ。・・・そしてあの子供もまた、憎しみという心の思いが世に生まれ出たもの・・・どちらも「思い」によって生まれてしまったものなのだ。呪は、そのきっかけ・・・心の不安を呼び起こすための、ただの引き金に過ぎぬ。」

## 第六話　ありのまま

それならば、呪いとは我々の心をかき乱して、自らの思いこみで自らを傷つけさせるだけのものということか。

「では、この傷は、俺があの子供に「刺された」と思った事によつて生まれたものなのか？」

「そういうことになるの。」

「……いや、まさか。」

しかし、事実、僕の手には水ぶくれが出来ている。

思ひは……体にも影響するのか。

方千は、これを教える為にわざとこのようなやり方をしたのか。

確かに言葉で説明されただけでは、信用できないようなことである。

「わかった、信じる。では、その事実を知ったからには、もう一度あの子供と対峙しても俺に勝ち目があるということか？」

「たわけ。人の思ひは理屈ではどうにもならん。奴の呪はお前の心に直接訴えてくる物だ。お前の心がかき乱れたときに、落ち着こうと頭で考えてもどうしようもならんだろ。それと同じだ。理で解したところで、どうにもならんだ。そんなことをすれば逆に相手の思ひ壺だぞ。」

「……では、どうすればいい。」

「簡単だ。ありのままをみればいい。」

「ありのまま？」

「そうだ。お前が眼で見、耳で聞き、鼻で香り、舌で味わい、身で感じたことをそのまま受け入れればよいのだ。」

「どういう事だ？」

「呪は、人の思いをだます。思いに惑わされる事がなければ、どんなに強い呪にもかかることはないのだ。」

「……そんなことが、できるのか。」

「実は、お前は気づいていないだけでもう出来ているのだよ。」

「……は？」

方千も……暦縁さんと同じようなことを言う。

「……そんなこと、どうすれば出来るようになるんだ？」

「どうすればいいか、ではない。何もなくていいのだ。」

「……そんなことを言われても納得は……」

ばん！

僕が言葉を言いかけた時に、いきなり方千が思い切り床を叩いた。

「なんだ！いきなり！」

思わず言葉を荒げる。

「……どうだ？」

「なにがだ？」

「お前は、今の音を理で解したか？床で叩いた音を頭で「聞こう」と思ったか？」

「……いや。」

「ほら、聞こうと思わずとも聞くことは出来るのだよ。特別何かし  
ようと思わなくとも、お前はいつもありのままなのだ。」

## 第七話 方千の正体

大切なのは それに気づくことだ。頭で理解しようとすればそれは逆に逃げてゆく。己の中で本当にそれを納得することが出来たのなら、どんな呪にでも負けないだろうよ。」

そう言って、

ほんと、僕の頭に手を乗せた。

「お前は、自分を苦しめすぎている。霊元はそれにつけ込んだのだろっよ」

そして、ゆっくりと優しく僕の頭をなでた。

「……霊元はおそらく、お前と同じようにあの子供の恨みを利用しているのだろう。」

「なぜ、……あいつはそんなことをしているんだ？」

「……わたしにはわからぬ。私に読めるのは人の心だけだ。それも、長寿の経験のたまもの。同じように生きている奴の心は、もう読めぬ。」

暇つぶしか、

それとも、

周りを巻き込んだただの自害行為なのか。

方千は独り言のようにそうつぶやいた。

「……いつたい、あんた達は何者なんだ？」

方千は、靈元の事を知りすぎている、知り合い同士である事は間違いは無いだろう。

しかし

方千も、靈元も 普通ではあり得ないほどの力を持っている。それこそ、人では無いかのような。

まるで、

……化け物と言われた、僕と同じような。

「ん？ 教えて欲しいかの？」

「……そこまで言っておいて、聞かずにおくのは気持ちが悪いだろう」

僕がそう言つと、方千は「それもそうなの」と言つてにやりと嗤つた。

「俺と靈元は突き詰めれば同じものだ…そうなの」一言で言えば

神様だよ。

方千は、事も無げにそう言った。

「は？」

「だから、お前達が神と呼んでいる物だ。これでも千二百年は生きておる。」

神様？

千二百年？

方千が？

「もつとも、我々は、人の「神様」という思いから生まれた、只の虚像にしか過ぎないがの。人が神という考えを作り出しだし、それを拝む事によって思いが強まり、俺達はこの世に生まれ出てしまったのだ。故に、人無くして、我々はある得ない。たった今も、お前というものが「方千」と言う存在を認めているからこそ、この世にあり続ける事が出来るのだ。もしもお前が、「方千」という存在を知らなければ、……俺はここにいないことすら出来ない」

俺も、その疵痕をつけた子供と同じようなものなのだよ。と方

千は自嘲しているかのようにそう言った。

## 第八話 荒涼神

「神とは、人の思い込みの産物なのだよ。人が望んだから、俺はここに生まれる事が出来た。人が「神」という「呪い」を俺にかけたのだ。神という呪いをかけられ生まれて来たものであるから、俺は人々が「神」という考えから連想されたものと、同等の力を使う事が出来る……例えば、憂は「神」から何を想像する？」

神。

神か。

神とは……

信仰の対象だ。

信仰する者に対し、幸福をもたらす者。

……望みを叶えるものである。

「そうなの……神とは望みを叶えるものだ、いや、叶えるものだと言われておる。言われておるからこそ俺も、人の望みを叶えることが出来るのだ。」

この国は、「神」が信仰の対象だ。その他の宗教は、多少例外があれども無い、ことになっている。暦縁さんや華梁が言っているような「仏の教え」というものは、わずかな人にしか伝わっていない。悪く言えば邪教と呼ばれても良いようなものである。暦縁さんや華梁のおかげで、知っている者が増えた事は確かであろう



が、未だ宗教として認められてすらいらないものなのだ。

この国は、ただ「神」の存在が信じられているだけである。おそらくは、ほとんどの国民が神と言う存在が実在するのを信じているのではないだろうか。だから、年の初め、年の終わりは必ず神に祈りに行く、願い事が有れば、わずかな浄財をささげ、願い事をつけにゆく。信仰者が多いが故に、それによる「御利益」があったと言う者も多く出てくる。それにより、また信仰者が増えてゆく。

疑いを持つ者も減ってゆく

「この国は、思いが強すぎるのだ。人の思いは、時として実在しない物までこの世に生まれ出でさせることがあるのだよ。」

それが、方千と、霊元。

そして、この僕の顔もまた、気が影響しているらしい。

神もまた

人の、思いだと言うのか。

「荒涼神と言うものを知っているかの？」

方千が、唐突に尋ねた。

荒涼神。

聞いたことが有る。

確か。

何年か前に起こった厄災につけられた名だったと思う。

「ごく最近の話だよ。ほんの十年前くらいだ。その年、ある村を原因不明の厄災が襲ったのだ。津波でもない、地震でもない、竜巻が起こった訳でも無いのだが……村が一つ、一晩のうちに跡形もなく消えさった事が有った」

「消えた？」

「ああ。まさしく、「消えた」のだよ。……その厄災が襲った後は、村には、建物どころか草木の一本も残っていなかったのだからな。もとあった村は、まるでそこには始めから何も無かったかのように……一晩の内に只の平地になっていたのだ。」

草木の一本も無く

それは、

あり得るのか？

少なくとも、天災ではあり得ない。地震だの津波だの竜巻だの、起こった後には必ず大きな爪痕を残す。

しかし、天災があり得ないとすれば、一体何なら可能なのだろうか？

……。

ああ、なるほど。

だから、荒涼「神」なのか。

人の望みを叶えられる、神ならば 可能だ。

「そうだ、こんな事が出来るのは、俺や霊元と同じ人の思いで作られた神でしかあり得ない。しかし、だ。そう考えれば、一つの疑問が起こる。」

## 第九話 H e t u - P r a t y a y a

「疑問？」

「そうだ、神は人に望まれなければ生まれる事はない。人に望まれなければ生まれようがないのだ、……元は、「無かったもの」だからのう」

それならば

「荒涼神は、誰かに望まれたから生まれた、と」

「……そうだ。しかしな、誰が荒神の出現を望む？誰が、自らを滅ぼそうとするものを生み出そうと望むのだ」

そうだ。

神が、人の「思い」から望まれて生まれた者だとすれば、当然、村を消した荒涼神もまた、誰かに望まれ無ければ生まれる事はない。

荒涼神は、望まれたからこそ生まれた。

では、誰が？

「俺はな……」

方千は、何かを思つように、ぽつりとつぶやいた。

「理が望んだからだと思つておる。」

「　　ことわり？」

「そうだ、神という、世の均等を崩す者が人の思いによって生まれたのだ。　　理は、当然、

均等を保とうとするだろう。神に太刀打ちできるものは神でしかありえんからの。荒涼神は、均等を保とうとした結果、思いによって生まれて来た者ではないかと、そう思えてならないのだ。」

そういえば、華梁が、前に同じようなことを言っていた。

この世界が網の目のような関係にある。お互いがお互いを支え合い、何か欠ければ、何かが狂う。均等を保ちながら、この世界は構成されている。

世の均等を崩すものが二つある、その一つが、人の思いだ。

そういう、ことが。

「その証拠にな、荒涼神は、村を消した後、まっすぐ俺の方へ向かってきた。おそらく、俺を消すことを本能で察していたのだろうな」

「……それで、どうなったんだ」

方千は、消えていない。

と、言うことは、方千は荒涼神を消すことが出来たのだろうか？

「負けたよ、手も足も出なかった。」

負けた？

「しかし……」

方千は、生きている。

「俺が荒涼神に消されそうになったとき、暦縁に助けられたのだ」

暦縁

暦縁さんが？

「……どうやったんだ？ あの人がそんなに強いとは思えないぞ」

「もちろん、荒涼神と戦ったわけでもないし、身を挺して守ってくれたわけでもない。少しだけ荒涼神を諭しただけだよ

あの子の話は、不思議な力を持っているから、荒涼神は元は人の子だった。話が通じない相手では無かったのだ」

「人の子、だったのか？」

元が人の子？

まさか

僕と、同じ？

「人の子だよ。もつとも、理は形のないものだからな、なににでもなり得ることが出来る。あるときは生き物、あるときは天災、ある

ときは人の思いとして、様々な形をしながら、世の均等を保つておるのだ。しかし、俺や霊元の力は世の均等を保たせる為には強大過ぎるのだよ、だからその力を押さえ込むために、「荒涼神」が生まれた。均等を、保つ為のな。俺らが人の世に干渉し過ぎれば荒涼神が生まれる。だから俺は、人の世に干渉しすぎないように、こんな山奥で一人暮らしている。あまりに力を使い過ぎれば、また十年前のようなことが起こってしまうからのう。」

「でも、それならば何故、霊元はあそこまで人の世に干渉しようとしているんだ？ 荒涼神の事を、知らない訳ではないのだろう」

「もちろん、霊元は知っているさ、荒涼神の生まれる要因もな」

「だったら、なぜわざわざ荒涼神を生み出そうとしているんだ？それは自らの死に近づくこうとしているだけじゃないのか？」

「だからだよ」

「は？」

「霊元はな……多分、自らの存在を消そうとしているのだと思う」

存在を、  
消そうとしている？

「……何故、そんなことを」

「人が生きるのには、俺らの寿命は長すぎるのだよ、人は考える事が出来る。考えれば思いが生まれる。思いがあれば苦しみが生まれる。苦しみから解放されなければ、永久に生き続けるのはつらすぎ

るのだ。霊元は、苦しみから解放される方法を見いだす事が出来ず、あきらめたのだ。だから、死を選ぼうと思ったのではないかの。

我々は、人の思いから生まれた故、思いが無くならねば、死ねぬ。我々は自ら死を選ぶことすら、許されないのだ。存在を消せるとすれば、理から生まれた荒涼神しかあり得ぬ。霊元は荒涼神を生み出し、自らの存在を消そうとしているのかもしれないな。」

「……じゃあ、なぜ、霊元は俺たちを襲うんだ？ 世に干渉するだけなら、わざわざ俺たちを襲う必要は無いだろう？」

「簡単だ。それは、お前達が曆縁の教えを守ろうとしているからだろう。……もつとも霊元は暇つぶしといったがの……霊元が何百年かけても分からなかった苦しみから解放される方法を、曆縁はあっさりと見つけ出したのだからな。……霊元にとってこれほど忌々しいものは無いだろう」

妬み、か。

数百年も、自分が求めてきた答えを、ほんの数十年生きた曆縁さんが見つけ出したのだ。

確かに、それは

霊元が生きてきた数百年を、否定する事にもなる。

「……もつとも、お前に対しては別の理由があるのかもかもしれないがの」

「別の理由？」



「あゝ」

「俺は、お前が、霊元の生み出した荒涼神ではないかと思って  
いるのだ」

## 第十話 居士覓罪懺罪（いじへきざいさんざい）

「俺が？」

「ああ、それならば、お前のその顔も、力も、霊元のお前に対する執心も全て説明がつくのだ」

そう言つて、方千はじい、と僕の顔を見た。

「お前の顔が、まだ半分人の顔をしているのは、お前の理性がまだ残っているからだろうな……お前の理性が、何らかの形で無くなつてしまえば、おそらくお前の顔は、完全に狐のそれに変わつてしまふだろう。」

思わず顔に手をやり、ゆっくりとなでた。

さりさりと、狐の毛の乾いた感触が手に残る。

左半分は、まだ人それである。

十年前のそのときから、僕の顔は少しずつ狐の顔に変化した。

しかし、ある日を境に、顔の変化が止まったのだ。

あれは

そうだ

暦縁さんが、僕を人と認めてくれた時からだったな。

暦縁さんは、顔の変わった僕を唯一人と認めてくれて、人と同じように接してくれた。

そうか

それで、僕は今まで、人としての理性を無くさずにいられたのか。

……この姿になり、何度も僕は人を捨てようと思った。

いつそ心も体も獣になりはて、畜生となり余生を生きた方が、罪に苦しまず生きることが出来ると思った。

だけど……暦縁さんに出会い、人として生きる内に、この気持ちが揺らぎ始めたのだ。

こんな僕でも、人として生きていても良いのではないかと。

こんな僕でも、幸せをつかみ取っても良いのではないかと。

暦縁さんのもとで暮らす内、ほんの少しだけそんな気持ちだが、僕の心の中で芽生え始めた。

でも、

僕は、それまでに人を殺しすぎていたのだ。

これほどの罪を背負いながら、一人だけ幸せになろうというのは、おこがましすぎる。

だから

いつそのこと

暦縁さんを殺して、そんな淡い希望を捨て去ろうとさえ思ったことがあった。

暦縁さんは、武術の心得などは無い。

寝ている隙に首を掻き切れば、容易く命を絶つことが出来る。

暦縁さんを殺せば、

僕を人として認めてくれ、僕自身が大切だと思ったこの人を殺せばおそらく僕の理性など、簡単に消えてくれるだろう。

罪の意識など生まれる間もなく

悲しみを感じる間もなく

後悔する間もなく

簡単に、僕を真の獣と変えてくれる。

苦しみが、無くなってくれるのだ。

それは、ひどく魅力的な考えだった。

ある日の夜に、  
僕は暦縁さんの首に手をかけた。

ひどく小さく、弱く、貧弱で、もろい体だと思った。

少しだけ手首をひねるだけで、この生き物の命を奪う事が出来る。

ひどく簡単だ。

こんな簡単な事をするだけで苦しみが無くなると思うと、滑稽で声をあげて笑いそうになった。

でも、

僕には、それが出来なかった。

僕が首を掻き切ろうとしたとき、

暦縁さんは、  
いつもの笑顔でにっこりとほほえみながら、  
右の、まだ人の形をしていた頬をなでたのだ。

まるで、

僕に、人であってほしいと語りかけるように。

それから先はほとんど覚えていない。

気がつけば、僕は死体の山の上で泣いていた。

暦縁さんを殺せず、感情がおさえきれなくなった僕は、西連寺の近くにあつた村人を手当たり次第に殺したのだろう。

うず高く積み上げられた、死体の山の上で、獣ともまごつ姿で……  
獣のように咆吼していた。

でも、

僕の理性はまだ残っていた。

涙が流れているのがその証拠だ。

僕は、

まだ、

人の姿を残している。

これだけのことをしても、

……それでも、獣にはなれなかった。

これだけ殺しても、理性を無くすことが出来なかった。

人のまま、人の罪を新たに背負ってしまったただだった。

人の命を、また奪ってしまったただだった。

自らの心をいたずらに傷つけてしまったただだった。

大切な人との絆を、

ただ乱暴に断ち切ってしまったただだった。

暦縁さんとはもう、合うことは出来ないと思った。

僕は、西連寺には二度と近寄らない事を心に決めて、村を後にした。

まだ僕は、あのときの選択が本当に正しかったのかどうか、迷うことがある。

あのときもし、暦縁さんの首をかき切っていれば、僕は本当の獣と

なつて人としての悩みが無くなつていたのではないかと。

救われていたのではないかと、

かなかなと、白々と夜が明け始めた朝靄の中で、静かに蜩が鳴いた。

「ふむ、……それで、お前はどつするのだ」

「……どつする、つて？」

「荒涼神になれば、悩みなど無くなるのではないか？ お前のそれは、神を殺すだけのただの獣だからな。……苦しみの起こる原因は、人の思いや考えだ。人の思いが無くなれば苦しみからは解放される。このまま霊元にされるままになつておれば、容易に荒涼神になれるだろうな。」

「……」

「しかし、このまま人の理性を持ち続け、人として生きるのであれ



ば、お前は死ぬまでその罪と心に悩まされる事になるだろう。」

「……ああ。」

「どうするのだ、憂？」

## 第十一話 不立

「魅力的だな、確かに。」

獣 荒涼神になれば悩みからは解放される。

この、獣になるという事を躊躇う心さえも、荒涼神となればなくなるだろう。

苦しみという概念が無くなれば、苦しむ事など無い。

考える事が出来なければ、思い悩む事は出来ないからだ。

過去を顧みる事が出来なければ、過去にあった出来事で思い悩む事もない。

未来を思う概念が無ければ、未来を思い不安に思うこともない。

比べる事が出来なければ、暑いと言うことも無ければ、寒いと言うこともない。喜怒哀楽と言う概念すらなくなる。

たった今があるだけで、それ以前の事柄とも、それ以後の事柄とも、比較することは出来なくなる。

否。

違う。

「苦しみ」「過去」「概念」「無い」「顧みる」「出来事」「未来」

「暑い」「寒い」「喜怒哀楽」「今」「事柄」「出来なくなる」「  
無くなる」

こんな概念すら、思想から生み出された考えでしかない。

そんなものは、本来、

「無」                      なのだろう。

いや

言葉で言い表せばそれはもう「無」ではない。

「無」すら、言葉なのだ。本当の、「無」ではない

これらは、全て頭の中で考え出された概念。

言葉で表せば、真実は逃げてゆく。

荒涼神になれば、こんな思想すら無くなる。

悩むという概念が無くなる。

それは、とても「楽」なことだろうな。

「おれは、どちらでも良いと思うがな。善悪など、個人が決めることだ、獣になろうと、人を続けようと、憂が正しいと思ったものが正しいんだ。誰が何と言おうとな。この世には真実など無い、それすらも人の作り出した概念だから。だから、お前が真実と想った選択が真に正しい真実なのだよ」

このまま、獣になると言う選択もある。

そちらを選んでも、誰もそれが間違った選択だと指摘することは出来ないはずだ。

獣になれば、苦しみが無くなる。

苦しみから、解放される。

が。

「……俺にとっては、その考えこそ間違っている。」

「　　どういう事だ」

「人も、獣だ。本来、苦しみから解放されているはずだ。それに気づかずに、苦しみから逃れようとあがき苦しんでいるだけだ。」

人もまた本来、悩みの概念の無い生き物のはずなのだ。

この世には今しか無い。過去と言うのも未来と言うのも全て頭の中の想像でしかない。…俺が杯でた床をたたいた音はたたいた瞬間にもう終わっている。それなのに、人は記憶してその事柄に執着する。終わったことをいつまでも頭の中で反芻する、事実はこのなにはつきりと終わっているのにもかかわらず、だ

大切なのはありのままの自分。蝸の鳴き声は聞こうと思わずとも耳に入る。肌は夏の暑さを感じる、目は夏の庭を見せてくれる。舌は酒を飲めば酒の味がするからな

この世には、苦しみは残っていない

「人は、始めから悟っている。ただ、それに気づけていないだけなんだ」

そうだったな、暦縁さん。

「俺は、人でなければ暦縁さんのこの言葉を証明出来ない。」

だから

僕は

「……生きて暦縁さんの言葉を証明しなくてはならない」

それが、

僕が暦縁さんに来る、唯一の償いだ。

償いとしては、とても足りないかもしれないけど。

僕が、苦しみから解放される方法を受け継ぐことが出来れば、たくさんの人を苦しみから救う事が出来るかもしれない。

だから、僕は。

「人として……生きることを選ぶ。」

両箇の月

ゆっくりと  
私は瞳を開いた。

ここは、どこ？

体を起こして辺りを見回す。

薄暗い、寂れた建物。

香の香りがほのかに鼻をくすぐる。

普通の、家ではない。

社<sup>やしろ</sup>とも違う……でも、

違うけれど、似ている気がする。

どこなのだろう？

分らない。

分らないけど、見覚えがある。

分らないけど、私はこの場所を知っている気がする。



そうか、

これは、体の記憶。

心が空のせいで、頭は何の記憶もとどめていないけれど。

体の方は、覚えている。

このにおい

この手触り

この風景

覚えている気がする。

でも

記憶は、無い

私の最後の記憶は、そう

夏祭り

そう、夏祭り。

私は、神に仕え、神の言葉を人々に伝える役目だった。  
私は、神に仕え、人々の願いを聞き届ける役目だった。

その夏祭りの夜も、

同じように神託を、人々に告げていたと思う。

それから…

……そう

皆が引け、寝静まったころ

最後に一人の男が現れたのを覚えている。

男は、怪我をしていた。

一目で手遅れだと分かるような、ひどい怪我。

それなのに、男の瞳は生氣に満ち、生きようという意志を感じた。

いや、生きようというよりも

生きて、何かをやり遂げなければいけないという、使命感の様なものが感じられた。

でも、男の体はもう限界で、生きたところで後数刻も持たない

そうか。

だから、最後の望みを叶えるために、私の所までやってきたのか

私には、望みを叶える力がある。

神に近い力を使うことが出来る。

「……………なに？」

私は男にそう問うた。

男は、

最後の力を振り絞り、

私に、願い事を告げた。

それから

……………それから、覚えていない。

それから先がどうしても思い出せない。

私の記憶は、ここまで。

ここから先は、心無くしていたように曖昧。

あれから、どれくらい時間がたったのだろうか？

体を見回す。

見慣れない紅い衣を着ている事以外は、体はあの頃とほとんど変わりは無い。

いや、

私は特別な存在だったから

あのときからずっと、成長の出来ない体になっていたはず。

だから

私の体は、小さいまま。

ずっと、何十年も、小さいままだった。

神に、従えていたから

神に近い存在だったから

私自身が神に近い存在だと「思った」から

神に、力を与えられた。

不老という、力を与えられた。

そう

私は、神に近い存在だった。

思いが強かったから

私は、普通の人が持っていない、特別な力を与えられた

神に近い力を与えられた

私は、神に近い存在だった。

でも

近いだけじゃだめだった

私は、神になりたかったのだ。

神に近い存在だったけど

神じゃなかった

じゃあ、

私は、何

私は一体、誰？

私は

私は

そう

私の、名前は。

そのとき、

月明かりに照らされた濡れ縁に、一人の男が立っている事に気がついた。

水干を着た、怖い目をした男。

いつの間に、立っていたのだろうか？

男は私を見て、冷酷な笑みを浮かべ、静かに口を開いた。

お前に、今一度望みを告げよう。

男はそう言って、

私に、再び、願い事を告げた。

## 第十二話 有時

たとえば、河かわをすぎ山やまをすぎがごとくなり。いまはその山せん河がと  
ひあるらめども、われすぎきたりていまは玉ぎよく殿でん朱し楼ろうに処しよせり。山せん河が  
とわれと、天てんと地ちとなりとおもふ。

抜粹)

(道元著 正法眼蔵 有時より

「人として、生きる」

僕がそう言つと、方千は楽しそうに口元に笑みを浮かべ

「か、」

か、

か、

か、



かかかかかかかかかかかかかかかかか

からからからからから

乾いた、嗤い声を上げた。

朝靄の中、蝸の寂しげな鳴き声に覆い被さる様に、方千の嗤い声が  
辺りにこだましている。

ひどく、楽しげに

何かがふっきれたように

でも

その嗤い声はどこか、寂しげで

静かで

悲しそうで

何故か僕は、

泣いているのかもしれない、と

そう、思った。

く  
く  
く

ひとしきり嗤った後、方千はつぶやくようにして口を開いた

「この国には、神はもういらぬのかもしれないのう」

「……え」

「神もまた、人の思いだからな、神では、人は救われぬのさ」

そう、

神もまた、人の迷いなのだ。

方千は、ぼつりとそう言った。

「のう、荒涼神」

荒涼神

僕の、事が。

「お前も、神だ」

僕が、

……神。

「完全に荒涼神にはなっていないお前でも、人には使えない力を持っている。その気になれば自らの願いくらいは叶える事が出来るだろうな。だが……」

お前は今、救われているか？

方千が、そう問うた。

救われているか、か。

僕は、救われているのだろうか

否

悩みだらけだ。

僕は、首を振った。

「神は、人の願いは叶えるが、迷いを無くすことは出来ない。願いを叶える事と迷いを無くすことは別だからだ。願いを叶える事で、逆に苦しみが生まれる事もあるのだ」

願いを叶える事は、苦しみを無くす方法ではない　　のか。

「救われるためには、己のこを見つめなければいけない、己の苦しみを無くす答えは己の中にしか存在しない。己自身が苦しんでい

るのだからな」

暦縁さんも、同じようなことを言っていた。

「救いに、神は関係無いのだ。救われないのなら、神などに気を取られるな、少しでもたった今の自分を見つめてみる」

たった今の、僕。

蝸の鳴き声が聞こえる。

方千の声が聞こえる。

方千の姿が見える。

傷の痛みを感じる。

坐っているから、足にせんべい布団の感触がする。

けど

次の瞬間には、僕の体はそれらの事を一つも留めてはいない。

ただ、僕の頭の中で、それらが連続して起こっていることだという風に「思っている」だけなのだ。

蝸の鳴き声は、聞いた瞬間にはすでに別の声になっている。

方千の声は、もう聞こえない。

方千の姿が先ほどと同じだと「思っている」のは、僕の思いだ。

「傷」が「痛い」という風に思うのは後から「考え出した」僕の思いだ。

坐っているから、足にせんべい布団の感触がするが、立ち上がればその感触はもう無くなっている。坐っていた、と言う記憶は「頭の中」にしか存在しない。

記憶を留めているのは僕の思い。

今しか、無い。

否、

今、と言う概念すら無い。

全ては思い。

無くなっている。

無くなっていることをいつまでも留めているは、

僕の、思いなのだ。

そして、

全てが思いだと考えていることですら、僕の思いに過ぎないのだ。

「救われるためには、神さえいらぬ、この身一つあれば十分なのだ。救われたければ、救いの道を得た人を探せ、探し出し出すことが出来たなら、得ている人に教えを乞え。幸いお前は、得た人を探すことが出来たはずだ」

暦縁さん

華梁

「なら後は、教えを乞うて只管ただひたすらに参ずるのがよからう」

と、言つて、

「のう」

方千は扉の方に体を向け、

「そうだろう、華梁」

そう、言つた。

第十三話 是非始因己 唯覚一場痴（前書き）

「是非始因己 道固不若斯 以棹極海底 唯覚一場痴」

是非善悪を始めから己が勝手に決めているが、もちろん仏道はこんなものではない、自らの見解で真理を極めようとするのは、まるでその場限りの愚かな行為である。

大愚良寛（漢詩の

一部を抜粋）

第十三話 是非始因已 唯覚一場痴

何ぞ必ずしも更に是を分かち非を分かち、得を弁じ失を弁ぜん。

「碧巖録」

「いつまで、そこに立っているつもりだ？ さっさと入ってこんか」  
方千がそう言つと、がらがらと立て付けの悪い戸が開いた。

そこには、神妙な顔をした華梁が立っていた。

「・・・・・・・・華梁」

「盗み聞きとは趣味が悪くなったのう、華梁」

「別にそんなことをしたつもりは無い。大体、じいさんなら俺が入っていることなんかお見通しだろう？ 入り口に張つてあつた結界・・・・・・・・ありや、侵入者を見破るための結界だ。わからないとでも思つたのか？」

「ふん」

「むしろ、人が悪いのはじいさんだろう？ 俺がいることに気づいていながら憂には何のそぶりも見せなかつたんだからなあ」



「その必要もないからの」

そう言つて、華梁は僕の方へ顔を向けた。

「よお」

「……………いつからいたんだ、華梁」

「初めからだよ」

「はじめから？」

初めから、ここに立っていたのか？

ならば、華梁は……………

方千の話をすべて聞いていたということになる。

当然、僕が荒涼神だと言うことも……………

「……………華梁、俺は」

「そんなことはとうに感じていたさ」

僕の口をふさぐようにして、華梁がそう言った。

「お前が荒涼神であろうが、何であろうが、俺は態度を変える必要がないだろう。荒涼神だから幸せになれることはない。それに、お前は人であろうときめたのだろ？」

こくりとうなずく。

「ならば、何の問題もない。荒涼神だから悪だとか、人だから良いだとか……そんなものは所詮、お前が作り出した勝手な思いでしかない。お前はお前で、ただそこに有るだけだ」

「……………」

「そこに善悪の区別をつけて、自分で勝手に苦しむな。苦しむだけ無駄だ。自分で自分の首を絞めてどうする」

はつきりと、何の迷いもないように……けろりとした顔で華梁がそう言った。

何を迷うことがある、と、そついいたげな顔で。

自らの悩みが小さく感じるような、そんな顔で。

華梁らしい、と思った。

荒涼神と……自らの境遇を恨もうとしていた自分が馬鹿らしく思えてくる。

「それよりも、憂。」

「……………なんだ？」

「あの子供の居場所がわかった」

「え？」

「あいつは、あの村から俺たちの去った後、霊元につれさられ、ある場所に幽閉されている。お前が会ったのは、あの子供の思いだ。実体じゃあない。ある場所に閉じ込められ、お前に対する憎しみを強くさせられている。．．．．．どこに幽閉されていると思う？」

僕への憎しみを　強くするために？

「．．．．．お前がいた、あの洞穴だよ。

あいつの親の死体と共に、な」

「．．．．．！」

「あいつは、連れ去られた後から今までずっと、洞穴に閉じ込められ、親の死体を見せられ続けていたんだ。お前への憎しみを忘れさせないために、お前への憎しみをより強くするために．．．．．」

ならば、あの子供は

自分の親の死体が腐り、蛆がわき、ひからび、骨になるまで．．．．

ずっと、あの子供は見続けられていたというのか

．．．．．それは。

惨<sup>むご</sup>い。

否、<sup>いや</sup>

惨いなどと僕が言える立場じゃない。

親を殺したのは……他ならぬ僕なのだ。

あの子に憎しみを背負わせたのは、他ならぬ僕なのだ。

一番惨いのは……僕だ。

「……近くまで行っただ、霊元の張った結界で洞穴の中に入れん。……だが、な」

そう言って。

「お前の力なら、結界を破れるかもしれん。」

華梁は僕をじつと見た。

「憂」

「……………」

「もしかすると、いやな物を見るかもしれん。昔の苦しみをもう一度背負う事になるかもしれん……だが、これは憂じゃない事だ」

「……………」

「来てくれ。憂」

華梁が、僕の瞳から視線を外さずにそう言った。

そう、だ。

行けば、自らの罪を真っ向から見つめなければいけない。

行けば、せつかくの治りかけた過去の傷をえぐられるかもしれない。

行けば、子供の悲しみを真っ向から見つめなければいけない。

また、立ち直れなくなるほどの悲しみを背負うことになるかもしれない。

僕はずっと逃げ続けていた。

つらいことから目を背けていた。

でも

僕は、

もう、逃げたくは、無い。

逃げても、同じだ。

何も、変わらない。

そしてそれを教えてくれたのが。

華梁だ

「ああ、もちろんだ」

僕は、力強くそう言った

## 説破（前書き）

羯諦 羯諦 波羅羯諦 波羅僧羯諦 菩提薩婆訶

智慧よ、智慧よ、完全なる智慧よ、完成された完全なる智慧よ、悟りよ、幸あれ

說破

暗く、狭い洞穴の中で、獣とも人ともつかぬ「もの」が嗤っている。

か か か か か か か か か か か か か か か か  
か か か か か か か か か か か か か か か か  
か か か か か か か か か か か か か か か か  
か か か か か か か か か か か か か か か か  
か か か か か か か か か か か か か か か か  
あ ・ ・  
か か か か か か か か か か か か か か か か  
か か か か か か か か か か か か か か か か  
か か か か か か か か か か か か か か か か  
か か か か か か か か か か か か か か か か  
か か か か か か か か か か か か か か か か

嗤い声とも獣の慟哭とも分からぬものが、くらい洞穴の中にこだま  
する。

噛い声も枯れ果てた。

まだ・・・考える事が出来ることが不思議なくらいだ。

もう、とくに僕の頭はおかしくなっていないにも不思議ではないのに。

僕は、生きているのか。

死んで、  
いるのか

死？

# 死とは



僕の目の前にある「それ」のことか？

死ねば、僕の目の前にある「それ」のようになる。

もう・・・親だとは思えない。

爛れ、腐り、骨になり、その骨すらも鼠にかじられ、死体とも呼べぬ姿となっている。

これは、人なのか？

人が、これなのか？

そもそも

人とは、何だ？

死とは、何だ？

もしも人がこれならば、どこまでが人だったのだ？

粉々になった今でも、これは僕の親なのか？

いったい、どれが、ひとで、どれが、おやで、どれが、ほねで、どれが、ぼくで、どれが、ねずみで、どれが、ぼくで、どれが、やみなのだ。

いったい、どこまでが、僕の親だったのだ

らう？

爛れたとき

腐ったとき

それは、僕の親だったか？

骨になったとき

砕かれたとき

それは、人だったか？

少なくとも、

何も知らない者が、「それ」を見たとき、間違いなく人だとは判断しないだろう。

ならば

どこで

何で

僕らはそれを人と判断し

親と判断していたのだろうか。



そのとき、

ざり、と人の足音のような物音が聞こえた。

人の、気配がする。

聞き慣れぬ、足音だ

あいつじゃない。

この足音は……僕をここに閉じ込めたあいつのものではない。

あいつであれば、足音で分かる。

ここに閉じ込められてから、耳に入る音と言えば、鼠が骨をかじる音と、あいつの足音だけである。

その足音を聞き間違えるはずもない。

ならば

なんだ

なんだ

だれ、だ

もう、頭を持ち上げ、相手を見ることも出来ない。

ざりり、と、足音の主は僕の前に止まった。

「  
を問おう」

足音の主が、何かを言った。

．．．．．まだ幼さの残る、女の．．．声だ。

よく、聞こえない。

問う．．．

何を？

「  
汝の願いを問おう」

願い事？

願いごと？

今更．．．

こんな僕に今更、何を願えと云うのだ？

お前は．．．．．誰だ？

「汝の願いを、一つだけ叶えよう」

「・・・・・・・・なぜ」

「それが、私の役目だからだ」

ぼう、とする。

何も、考えられない。

願いごと・・・・・・・・

ねがい、ごと？

僕の、願いは、何だ

今更この洞穴を抜け出ようとは思わぬ

抜け出ても、つまらぬ現実を突きつけられるだけだ

もうこのまま朽ち果ててゆくのが僕の望みだ

・・・・・・・・ただ、

唯一・・・・・・・・心残りと言えば

狐

僕を

僕を

僕をこのような目に遭わせたあの狐を

×  
×  
×  
×  
×

「私には、お前の願いを叶える力がある」

おまえは

お前は

「お前は、誰だ？」

「わたしは」

荒涼神だ

声の主は短くそう答えた。

荒涼神？

神？

神か。

ようちく



ようやく

ようやく

神が、現れた。

どれだけ祈ったことか  
どれだけ願ったことか  
どれだけ拝したことか

「神よ」

僕はすがりつくようにして、神に願いを乞った。

「力を」

あの、

あの、狐を殺す

「力を、くれ」

声の主はゆつくりと僕の顔を、小さな手で覆った

一瞬だけ、その声の主の顔が見えた。

まだ幼く、あどけなさが残る。

人形のような、娘だった。

第十四話 子、若し在らば、即ち人を救い得たらん（前書き）

無無無。

第十四話 子、若し在らば、即ち人を救い得たらん

この世は理ことわりよつて均等が保たれている。

人の思いによつて生まれた 神

方千

霊元

その神によつて崩れた均等を保とうとして生まれたもの  
十年前の、荒涼神  
荒涼神  
そして、

僕。

「そう言えば、憂はまだ知らなかったな」

唐突に、華梁がそう言った。

「何をだ？」

「あの子供の名前だよ」

「名前？」

暗い森を、一心不乱に走っている

僕らは方千と別れ、あの子供の閉じ込められている洞穴へ向かっていた。

驚いたことに、白々と明け始めたと思っていた空は、方千の庵の外へ出た途端、夜のそれに変わっていた。どうやらあの庵の中では、外とは違った時間が流れていたようだ。

まだ     あの子供を助ける事が出来るかもしれない

そんな     儚い、希望のような思いを胸に抱きながら、僕らは暗い森をかけていた。

「あの子の名前は夜季<sup>よき</sup>だ」

華梁が、そう言った。

「なぜ、知ってる？」

「・・・・・・・・一年前のあのときからだ、夜季に式神をつけて、それとなく調べて様子を見てたのさ」

暗い森の中、華梁の声だけが透き通るように聞こえてくる。

式神

華梁は多少、呪術を使える。

式神というのは、華梁の使い魔の様なものである。

「だが、少し前から・・・・・・・・ぶつつりと夜季は姿を消した。それも、式神で探し出せないくらいに完全に消息を絶ったんだ。おそらく、何かの結界だろうとは思ったが・・・・・・・・私も、術は専門ではないからな、手の出しようが無かったんだ・・・・・・・・それからはどう探しても夜季を見つける事が出来なかったのだが・・・・・・・・今日、お前の前に現れた事でようやく場所は特定することが出来た。」

それが

あの、洞穴か。

「洞穴には三重の結界がはられていたよ。単純に洞穴に入れなくなる結果と・・・・・・・・洞穴の事を「見つける事が出来なくなる」結界。そして洞穴のことを誰も「気になくなる」結界だ。それも・・・・・・・・どれも強力な。あれだけの結界がはれるのは今のところ、方千と霊元・・・・・・・・それくらいだろうな」

しくじった、と華梁は悔しそうにつぶやいた。

「霊元の・・・・・・・・」

「ん？」

「霊元の目的は何だ？」

荒涼神を生み出す。

それだけにしては・・・・・・・・何か・・・・・・・・何か腑に落ちないものがある。

行動が・・・・・・・・矛盾しているのだ。

「霊元の目的は明白だ。「荒涼神」を自らの手で生み出すことだろう。おそらく霊元も、お前が荒涼神だと知っている・・・・・・・・いや、違うな。もしかすると、むしろお前を荒涼神にしたのは、霊元自身かもしれない」

「・・・・・・・・な、に」

「お前、以前に霊元と会ったことがあるかもしれないと、話してくれたことがあっただろう」

「ああ」

たしかに霊元の顔は・・・・・・・・始めて会ったときから、見覚えがある気がした。

しかし、僕はそのときの記憶を、どうして思い出すことが出来ない。

「霊元ならば、記憶を操るくらいなことは容易いからな。お前の頭から自分自身がやったことの記憶を消したのだろう。術の方法を知れば、それを解く方法も見つけやすくなるし、霊元の記憶がない方が、お前自身に警戒が無くなり都合がいい。だから記憶を消し去った方が良かったのだろう」

「しかし、俺が荒涼神なのであれば、目標は俺であるはずだ。なぜわざわざ夜季を閉じ込める必要がある。」

「それは、お前がまだ完全な「荒涼神」になっていないからだろう？」

「いや、俺に消されるのが目的ならば、霊元自身が俺の前に現れるのがもっとも手っ取り早い。世に「かわること」と、荒涼神である俺に「かわること」、それが同時に出来るわけだからな。・・・なぜわざわざ夜季を使い、一年という時を待ち、間接的に俺を攻撃させるんだ？」

荒涼神を生み出すのが目的であれば・・・簡単だ。霊元自身が世にかかわればいい。理は神の異質から、「世の中の均等」を保つため、荒涼神を生み出し易い環境を作る。

僕が、生み出される「荒涼神」の一番の候補だ。覚醒すれば霊元が存在を消す事が出来る「もの」となる。

そして、それが霊元の目的のはず。

が、



霊元の行動はまるで真逆である。

自分からかわろうとせず「夜季」という間接的な存在を使い、まるで自分からは手を出さぬようにしているかのように、霊元自身は表だって動いてはいない。

目的と行動が、矛盾しているのだ。

まるで

心のどこかで、僕にかかわることを恐れているようなように。

ふむ、と華梁が走りながら考えこむような仕草をする

僕が、気にかかっていることは、それだけでは  
ない。

おそらく、華梁も気づいていないだろうと思う。

庵を出た時から、ずっと気になっていることがあった。

それは、

方千が、最後に言った言葉だ。

庵を出るとき、方千がぽつりと独り言のようにつぶやいた、あの言葉。

おそらく、誰にも聞こえることの無いような小さな声であったが、獣のように発達した僕の耳は皮肉にもその声を拾っていたのだ。

おそらく、方千自身もそれを言ったことに気づいていないだろう、それほどに、その声は小さく、か細く、弱々しく、それでも、切に心からそれを願っているような、確信と願いのこもった言葉。おそらく、その言葉は方千の本音であったのだろう。

方千は、

方千は

霊元を、救ってくれ、と

確かにそう言ったのだ。

華梁には聞こえていなかった様だが、僕の耳には確かにそう聞こえた。

なぜ、

方千は

夜季ではなく、

霊元の救いを、願ったのだろうか？

「霊元は」

方千は

何を、考えているのだろうか？

華梁は少し考え込むように首をひねっていると

「ふむ、なるほど」

一人で得心したように、うなずいた。

「・・・・・・・・・・なにか分かったのか？」

「目的変更だ。憂」

「は？」

霊元を救うことが、出来るかもしれん

そう、華梁が言った。

「・・・・・・・・え？」

霊元を、

救う？

「本当か？」

「・・・・・・・・私の憶測が間違っていなければ、だがな。」

「憶測？　　どういうことだ？」

華梁には、

華梁には、何か分かったのか？

「説明は後だ」

ぴしゃりと華梁が言い放った。

「まずは、夜季を助ける。話はそれからだろう」

「・・・・・・・・ああ」

森を抜ける。

と。

そこには 見慣れぬ風景が広がっていた。

「なん、だ？」

元、洞穴のあった谷は、まるで巨大な手のひらに引きちぎられたかのように、大きく抉<sup>えぐ</sup>れていた。

一年前にあった洞穴は影も形もない。

なにが、あった？

「華梁・・・・・・・・・・洞穴はどこだ？」

「・・・・・・・・・・」

華梁が顔をゆがめる。

そして、眺めるように辺りを見回し、ある方向に視線を向けたとき・  
・・・・

急に、ぴたりと華梁の動きが止まった。

「華梁、どうした？」

「・・・・・」

じい、と、視線の先を凝視している。

そして、

「遅かった、か」

静かに 心からくる絶望を隠しきれないような声で、そうつづや  
いた。

華梁の視線の先を見る、

円形に挟れた場所のちょうど中心

そこに

そこに

そこには

黒く、つごめく影が、ぽつりと立っていた

## 第十五話 混沌

ざわ　と全身の毛が逆立つ。

なんだ・・・・・・・・あれは？

人？

いや

生き物なのかすら分からない。ただの黒い固まりである。

全身が影のように真っ黒だ。

目をこらす

なんだ、あれは

かすかに人の形をしているような気がする。

つかみどころのないゆらゆらとした影、だが、確かに手足がある、  
そして、頭も。

その・・・・・・・・顔に当たる部分の半分が、白い、髑髏の様な仮面  
で覆われている。

人・・・・・・・・か？



いや  
いや  
いや

あれは  
人じゃない。

人にしては禍々しすぎる

あまりにも・・・・・・・・人とかけ離れ過ぎている。

なんだあれは？

なんだあれは  
なんだあれは  
なんだあれは  
なんだあれは  
まずい  
まずい  
まずい  
にげる  
にげる  
にげる

僕の本能が、直感が、先ほどからつるさい位にそう告げていた。

どうする

どうする

理性が、その僕の逃げようとする本能を、かるうじて押さええている

そのとき、

ぐいっと、華梁に腕を捕まれた。

「・・・華梁？」

「逃げるぞ、憂」

僕の気持ちを代弁したかのように、華梁がそう言った。

しかし

しかし、夜季が

「夜季はどうする・・・！！」

「・・・」

「おい！華梁」

「頼む」

「な・・・・・!？」

「ここは、私に従ってくれ」

「従うって、なぜだ！ あれは……あれは何なんだよ」

「早くしろ！憂！！！」

ぐいっや

華梁に無理矢理腕を引っ張られる

そのうち、

[illegible]

甲高く夜の闇を引き裂くように「それ」咆哮した。

思わずひれ伏してしまいそうな、禍々しくも神々しい叫びだった。

およそ人の叫びではない、

獣の叫び声ですら無い。

人とも

獣ともつかぬ 「なにか」

あれは

あれは

そのとき。

その黒い者が僕の方を見て

にたり、と嗤った気がした。

そして、僕に向かって

心の底からうれしそうに 言った。

「  
みいにつけた。」

その瞬間に直感する。

「あれは」

あれが

夜季、  
だ。

第十六話 千手（前書き）

とじし回き合ひし。

## 第十六話 千手

黒く

黒く

ただ黒く

闇と、見まごうほどの「何か」

人の形をしているが、確かにそれは闇だった。

とらえどころのない、闇だった。

ただの、黒き、混沌だった

そして、

その混沌に

自我が芽生える

疑問が芽生える

そして、

その疑問を解こうと思考が芽生える。

闇の

混沌の

始めの、疑問はこうだった。

「死とは何だ」

そう、問うた。

何度も自分に問いかけた。

死とは何だ  
死とは何だ  
死とは何だ  
死とは何だ  
死とは何だ  
死とは何だ  
死とは何だ  
死とは何だ  
死とは何だ  
死とは何だ  
死とは何だ  
死とは何だ  
死とは何だ  
死とは何だ  
死とは何だ



死とは何だ  
死とは何だ  
死とは何だ  
死とは何だ  
死とは何だ  
死とは何だ  
死とは何だ  
死とは何だ  
死とは何だ  
死とは何だ  
死とは何だ  
死とは何だ  
死とは何だ  
死とは何だ  
死とは何だ

ぶつぶつ、ぶつぶつ、ぶつぶつ

次の疑問はこうだった。

「生とは何だ」

そう、問うた。

何度も自分に問いかけた。

生とは何だ  
生とは何だ  
生とは何だ  
生とは何だ  
生とは何だ  
生とは何だ  
生とは何だ  
生とは何だ  
生とは何だ  
生とは何だ  
生とは何だ  
生とは何だ  
生とは何だ  
生とは何だ  
生とは何だ

生とは何だ  
生とは何だ  
生とは何だ  
生とは何だ  
生とは何だ  
生とは何だ  
生とは何だ  
生とは何だ  
生とは何だ  
生とは何だ

そんな疑問を繰り返す。

ぶつぶつ　ぶつぶつと繰り返す

いくら考えても答えのでない、疑問をひたすら思考する。

わからない  
わからない  
わからない  
わからない  
わからない

わから  
理解ない

そして、  
闇は気づく。

自分が追っていた物の存在を。

きつね、だ。

「きつねきつねきつねきつねきつね」

闇は、そつつぶやきながら、みずからの手を見つめる

黒き手のひら

いつの頃からその闇は、  
思い込みで、自分を律しようとしていた。

この手は父の手

おとうさんの手

たのもし手

なんでもできるおおきなて

この顔は母の顔

おかあさんの顔

削り取られ骨となったお母さん顔

やさしい、おかあさんのかお

だから

いつもおかあさんがみている

あんしんできる

みまもってくれる

だから、

ぼくは、不安にならない。

これからきつねをころすことも

おかあさんといっしょなら

こわくない

さあ、はじめよう

闇に、

欲望が、芽生えた。

闇は、この世を思い通りにしたいと、そう思った。

きつねを、殺したいと、そう思った。

てよ

て

て

て

て

おとうさんのてよ

僕に、力をかして。

その、手のひらを、狐へ向ける

てよ

僕の無数の想いとなり

きつねをとらえろ

僕の、おもいをかなえよ。

その瞬間、夜季の体から無数の手が生える

背中から

肩から

十

百

そんな数は、ゆうに超える

千

千の手のひら

無数の、黒き手のひらが、夜季の背から肩から、幾数の腕とともに、  
生える。

自分の思い通りにするために

きつねを殺すために

それは、まごう事なき自我だった。

揺るぎようのない欲望だった

完全なる思考だった。

そして、きつねは思考する。

きつねの存在と、みずからの存在の答えを出そうとする。

答えの出ぬ問いに、無理に答えを出そうとする。

自分の見解で、この世の答えを出そうとする。

きみは生まれ生きているだけで罪だ

きみは罪と向き合うことが必要だ

僕は

君に、罪を与える事を許された存在。

さあ、

いくよ

きつね

きみは、自分と、  
闇は、自分と

どう、向き合っっ..



## 第十七話 欲望（前書き）

### 千手観音

日本語では「十一面千手観音」、「千手千眼観音」、「十一面千手千眼観音」、「千手千臂観音」などさまざまな呼び方がある。「千手千眼」の名は、千本の手のそれぞれの掌に一眼をもつとされることから来ている。千本の手は、どのような衆生をも漏らさず救済しようとする、観音の慈悲と力の広大さを表している。

## 第十七話 欲望

黒い、人型の闇から、幾本もの腕が生えてゆく。

「あれは、混沌<sup>こんとん</sup> だな」

華梁がぼつりとそう言った。

混沌。

全てが混ざり合ったもの。

天と地、万物の諸々のものがまだ分かれていなかった頃の、全ての始まりの状態。

形の無いもの。

何ものでもなく、何ものでもあるもの。

以前、華梁から混沌についての話を聞いた事がある。

混沌っていうのは、全ての 何もなかった頃の、始まりの状態だ。私達は始め、混沌とした世界から生まれ落ちたんだよ。そこから色々な因果があつて、今のこの世界が生まれたんだ。

そう言っていた気がする。

しかし、

混沌ならば、姿がないはずだ

僕がそう聞くと、華梁は軽く首を振った。

「意思を持てば話は別だ。混沌が意思を持ち、目的をもち、自我を持てば 己の姿を自在に変える事が出来る ああ姿は、夜季が望んだ姿なのだろう」

華梁が言った。

夜季の望んだ姿？

幾本の手。白骨の顔。

あれが、夜季の望んだ姿なのか？

夜季が望むこと

考えるまでもない。

僕を、殺すことだ

「けたけたけたけたけたけた」

夜季が嗤う。

その嗤いに覆い被さるように、白骨の歯がかちかちと音をたてる。

けたけたけたけたけたけた

かちかちかちかちかちかち

止めどなく、夜季の嗤いが辺りに響き渡った。

今まで、これほどまでに楽しそうに、これほどまでに悲しそうに、これほどまでに救えない嗤いは聞いたことがない。

けたけたけたけたけたけた

嗤う。

おかしそうに嗤う。

望みの姿になれたからだろうか。

小気味よく嗤う。

仕合わせになれたからだろうか。

仕合わせそうに嗤う。

幸福に、なれたからだろうか。

だから、そんなに愉快なのか

だから、そんなに楽しいのか

だから、そんなに嬉しいのか

でも、夜季。

それが、望みだったのか？

それがお前の幸福か？

それがお前の仕合わせか？

それがお前の救済か？

それがお前の安楽か？

問わずにはいらなかった。

「なあ、夜季」

おまえは

「お前は、それでよかったのか」

そんな

そんな姿が、人の望みなのかと

そんな姿が、人の幸福なのかと

そんなものが人の仕合わせなのかと。

そんなものが、人の幸福になれる真理なのか、と。

ぴたり、と、混沌の嗤いが止まった。

「足りない」

混沌はそうつぶやいた。

「まだ、足りない」

再び、言う。

「まだ？」

聞き返すと、混沌はこくりとうなずいた。

「まだ、足りないんだ」

悲しそうにつぶやく。

そして　子が母に、だだをこねるように言った。

「お前を殺したいな」

夜季がそう言うと、

その望みに答えるように、

手が、増えた。

「お父さんとお母さんがほしいな」

手が増える

「友達がほしいな」

手が増える

「色んなこととして遊びたいな」

手が増える

「色んな物がほしいな」

手が増える

「おいしいものも食べたいな」

手が増える

「お金も沢山ほしいな」

手が増える

「みんなから尊敬されたいな」

手が増える

混沌が何かを言ったびに、一つずつ手が生えてゆく。

「足りないんだ。 仕合わせになるにはまだまだ足りない」

手が増える

「たりない、たりない、たりない、たりない、たりない」

ぶつぶつ、ぶつぶつ、ぶつぶつ



つぶやくたびに、手が増えてゆく

まるで、夜季の望みをかなえる為に、欲の数に応じて手が生えていくかのようだ。

「そうだ」

思いついたように夜季が言った

「一つずつかなえていこう」

幼子のように言う

「僕には、その力がある」

そうだそうだそうだ。

かんたん、かんたん、かんたん。

嬉しそうに けたけた、と嗤い、こちらに顔を向けた。

まずはお前からだ。

そう、言った気がした。

「しね」

その瞬間

千の手が、僕に向かい、一斉に襲いかかった。

第十八話 クロイソラ（前書き）

閑話

## 第十八話 クロイソラ

黒く、禍々しい手が、僕に追い被さるようにして夜空を覆った

必死の思いでその手を払いのけようとするも、幾本の腕は際限なく僕を襲う。

腕を

脚を

顔を

胴を

黒い腕に締め上げられ、たちまち身動きがとれなくなった。

「はなせ……………離せよ……………」

僕のその声も空しくかき消え、僕の体は暗闇と同化してゆく。

黒い腕の固まりが一体となり、僕の体を貫く。

貫かれた場所から

その黒いものの感情が、洪水のように僕の心に流れ込んできた。

憎悪

憂い

「かはっ……………」

なんだ、これ

これが、夜季のころ

身を焼くような憎しみ      否それよりも

これは

自分自身の心を呪った悲しみ      か？

最後に見た光景は、僕の視界にある、夜空にぼっかりと浮かんだ白い月を、禍々しい黒き腕に浸食されている光景だった。

あがこうとするも、無数のうでが僕の手足をつかみ、身動きがとれない。

うでが、僕の胸を貫いてゆく。

自らの胸を貫かれているのに、僕の頭の中はひどく冷静だった。

その光景は、ゆっくりと、まるで走馬燈のように、僕の目の前にひろがっている。ひろがっている、という表現は、いまの僕の心境をよく表している。

まさに、ひろがっていたのだ。

心地よいくらいに、己の胸がえぐられる瞬間のその光景が、世界の全てに見えた。

僕にはいま、何もかも見えている。手足を拘束された諦めの為か、

僕の神経は、僕の目に瞳に、全て集まり、自らが貫かれるその光景を、まるで娯楽の為に作られた演劇をおもしろおかしく凝視するように、客観的に、他人事のように、己の死の瞬間を見つめていた。

ざまあみろ

始めに浮かんだ言葉がそれだった。

それはまるで悪事を働いていた敵役が、主人公との死闘の末、あつけなく殺される瞬間を見つめているような心境だった。

敵役

僕のことだ。

もしも、僕の生き様を演劇にするのであれば、間違い無く、僕は主人公の敵役だ。

村人を殺し残虐非道を繰り返した化け物。

これほど敵役に徹した役柄は、そうはいない。

僕は、悪だ。

どんな人の目から見ても、僕の行為は紛れもない、悪なんだ。

悪は、裁かれる。

たった今、僕は、自らの罪を裁かれている。

夜季の親を殺したから、代わりに夜季に殺される。

当然の運命だ。

演劇にもならないような、ごく当たり前の理だ。

こうして悪は滅びていく。

悪は滅びて世界は良くなっていく。

僕が死んで夜季が仕合わせになる。

悪

悪。

悪って、何なのだろう？

みんな、必死に生きてるだけじゃないか。

なぜそれに、分別をつけるのだろう？

僕だって。

普通の人になりたかった。

みんなと遊びたかった

母に甘えたかった

父に甘えたかった

成りたいものもあつたんだ

やりたいこともあつたんだ。

でも、

みんな、それを許してくれなかった。

境遇がそれを許してくれなかった。

この顔のせいで、それを許してくれなかったんだ。

僕だつて

僕だつて

仕合わせに、なりたかったのに。

「憂！」

ダレカノサケビゴエガキコエル





第十九話 Pessimism (前書き)

地上の人の世に生まれず、きらめく日の光を見ず、

それこそすべてに勝りてよきことなり。

されど、生まれしからにはいち早く死の神の門に至るが  
次善なり

詩人

テオグニス

## 第十九話 Pessimism

禍々しく、黒く混沌とした手の中から、どの手よりも強い力で僕の身体を引く腕があった。

やさしくて、温かい手腕。

これは

華梁の、手だ。

「お前は仕合わせになる資格がある」

そして、今度は「黒い物」に向かって

「もちろんお前にもだ、夜季」

そう、言った。

ざわりと、黒き腕が波打つ。

「……ナにを当たり前のことヲいつてるの？　ボクはそれを知っているからこうして」

「いや、知らないな」

「ナ………に？」

「いくら千の手の力を持つとも、そのようなやりかたで仕合わせ

になどなれるものか」

「・・・・・・・・・・どういう、ことダ」

「力は、力だ。求めれば力を使い手に入る事も多いだろう、  
だがな　それだけでは求める心を無くすことはできないんだ」

「求める・・・・・・・・・・こころ？」

「お前の手がいくら多かろうが、月をつかむ事は出来ん、星をつか  
む事はできん、日の光をつかむ事は出来ん、空を手に入れる事は出  
来ん、宇宙を我が物にすることなど出来ん、

求めるこころを満たして得る喜びなど、一時の満足にしかない。

欲しいと思うお前の心が、「たった今このとき」を満足出来  
ないお前の心が

お前を仕合わせから遠ざけている。

それを満たし続けた所で、欲しいと思うこころを更に強くするだけ  
だ」

それを聞くと　、黒い物は、心の底から嘲笑したように・・・・・・・・  
・・わらいだした

けらけらけらけらけらけらけらけらけらけらけらけらけらけら  
けらけらけらけらけら

「お前ハナニも分かってない」

地から響き渡るような、恨みに満ちた声を出す。

「だから、僕を救えなかった」

黒い物は、僕をつかんでいた 幾千の腕を一斉に放し

月明かりを遮るように、腕を天へとのばした。

そして

その腕を一斉に華梁へと向けた。

標的を、華梁へと変える。

「おい、偽善者」

ぎり、と、全ての黒い腕に力を込める。

「お前八、本当二苦しんでイル人の心情を理解していない」

闇夜を覆い隠すほどの幾千の腕が肥大する。

「本当ニ苦しんでイル人は、常に助けを求メてる」

「たとえお前が言ったことが真実デあり、更に苦しム結果を招コウとも」

今の苦しみを少しでも無くせるのなら

平気でそれにすがってやろう

## 第二十話 問い

「それで、さらに苦しむのか？」

華梁は　そう、言った。

「今よりも、今よりも、今よりも  
そうやって今より他に求めて」

「その手は、お前の欲の数だけ増えてゆく」

「今を満足しないまま」

「かまわない」

夜季が、闇が、混沌が、

そう断じて言う。

「今の

今の苦しみよりもマシならば

僕は、それでよいのだ」

「ならば、今とはなんだ？」

華梁が問いかける。

「いま？」

夜季の体が、腕が、じわりとざわめく。

じり、と華梁が夜季の方へ歩を進めた。

「求め続けている、それがお前の今、だ」

「渴仰している、それがお前の今、だ」



「それが死ぬまで続く」

「命が尽きて、朽ち果てるまで続く」

「全てが無くなって、ひとりぼっちになるまで、そのままだ」

「問うぞ、夜季」

「今のお前は、本当に満ち足りているか？」

「お前は、永遠にそのままなのだぞ」

「例えこの世を食らおうと」

「例えこの空を食らおうと」

「例えこの宇宙をくらおうと」

「例えこの世の全てがお前の手の内に入ろうと、今に満足しなければ、満ち足りている事を知らなければ……その渴仰する気持ちは無くならないのだぞ？」

「嘘ダ」

「嘘なものか」

「今、とは永遠だ」

「永遠に今が続いているだけだ」

「永遠とは、「今」の連続なんだよ、夜季」

「その今に満足出来なければ」

お前の渴仰は永遠に 乾くことはない。

「それでも良いのか、夜季？」

「嘘だ」

「嘘だ、嘘だ、嘘だ」

嘘だ

嘘だ

嘘だ

嘘だ

嘘だ

うそ  
だ

「うそ」

ダ

あああああああ  
あああああ！！！！

!!!

悲鳴のように咆哮する。

「ならば」

「ならば人は」

私は

僕は

「何故、生きているのだ？」

ぐらり、と影が揺らいだ。

頼りなく、闇夜に溶け込むように弱々しく、女々しく

冷たい地面に倒れ込みそうになる。

そのとき

「どうした、夜季？」

闇夜に、困惑した霊元の声がひびいた。

「なぜ苦しむ？ 夜季よ」

「なぜ悲しむ？ 夜季よ」

優しく、いとおしく、包み込むように

霊元が影に向かって、語りかけている。

「おまえは、そのままでいいんだよ」

「皆、そのようなものはわからぬ」

「心から満足出来ぬまま、人の命を終えるのだよ」

「ならば、

ならば

なぜ人は生きている

のだ？」

悲鳴のように　夜季の声が闇夜に響く。

「意味など有るわけがないだろう?」

「生まれたから、生きる」

「それだけなのだよ、夜季」

霊元が　、強く、そう言いはなつた。

「私は、その答えを知るために八百年生きた」

「人からは神とも崇められたこともあつた」

それでも

「分からなかったのだ」

生きる意味も

生きる意義も

生きる目的も

「私には、何一つ分からなかったのだ」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0786g/>

---

闇路妖狐

2012年1月5日22時50分発行